

令和3年度

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

# 実践報告書

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

# 目 次

○令和3年度 総会及び研修会（講演会） .....	3
---------------------------	---

講演題「大学におけるダイバーシティ教育」

○令和3年度 部会活動報告 .....	26
---------------------	----

## <教科別部会>

- ・国語部会
- ・社会部会
- ・理科部会
- ・音楽部会
- ・図画工作・美術部会
- ・体育・保健体育部会
- ・英語（外国語活動）部会
- ・技術・家庭部会

## <領域別部会>

- ・総合部会（生活単元学習・遊びの指導・生活科）
- ・道徳部会
- ・生徒指導部会
- ・特別活動部会
- ・進路指導（キャリア教育）部会
- ・学校経営部会

## <校園別部会>

- ・幼稚園部会

○秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要領・申し合わせ事項 .....	54
--	----

---

# 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会

## 総会及び研修会

---

日 時: 令和4年2月16日(水)  
15:00~16:45  
開催形式: Zoom  
進 行: 附属中学校副校長 櫻庭 豊

### 【 次 第 】


- 1 開会あいさつ・講演会講師紹介 (委員長 星 宏人)
- 2 講演会 (70分) (出席者数: 144名)

演題: 大学におけるダイバーシティ教育

講師: 東京大学副学長 (ダイバーシティ教育担当) 伊藤 たかね 特任教授

概要: 自分とは異なる考えをもつ他者を理解しようと努力する姿勢や、その努力の中で自分自身の考え方を相対化する力を涵養することが、リベラルアーツ教育の根幹を成すと考えています。社会がグローバル化し、さまざまな「格差」が拡大する現代において、この重要性は増すばかりです。多様性に欠けると言わざるを得ない日本の大学におけるダイバーシティ教育の重要性を、みなさんとともに考えたいと思います。長く英語と言語学を教え、国際教育にも関わった経験から、いくつかの提案も試みたいと思います。

- 3 佐藤修司 学部長 謝辞・あいさつ
- 4 各部会 (16:25~16:45)  
※終了後、部会ごとに解散。



# 大学における ダイバーシティ 教育

---

伊藤たかね

東京大学副学長

(ダイバーシティ教育担当)

# 大学におけるダイバーシティ教育

---

- 他者理解・自己相対化の重要性
  - グローバル化する社会
  - 「格差」の拡大する社会
- 大学内コミュニティの同質性→教育の重要性
  - 無意識のうちの前提を問い直す経験をできているか？

# ロードマップ

---

- 大学におけるダイバーシティ：実情
- ダイバーシティ教育の重要性：理論と実践
- 実践教育のいくつかの提案
  - 国際交流
  - 外国語教育
  - 手話教育

# 日本の大学の ダイバーシティ

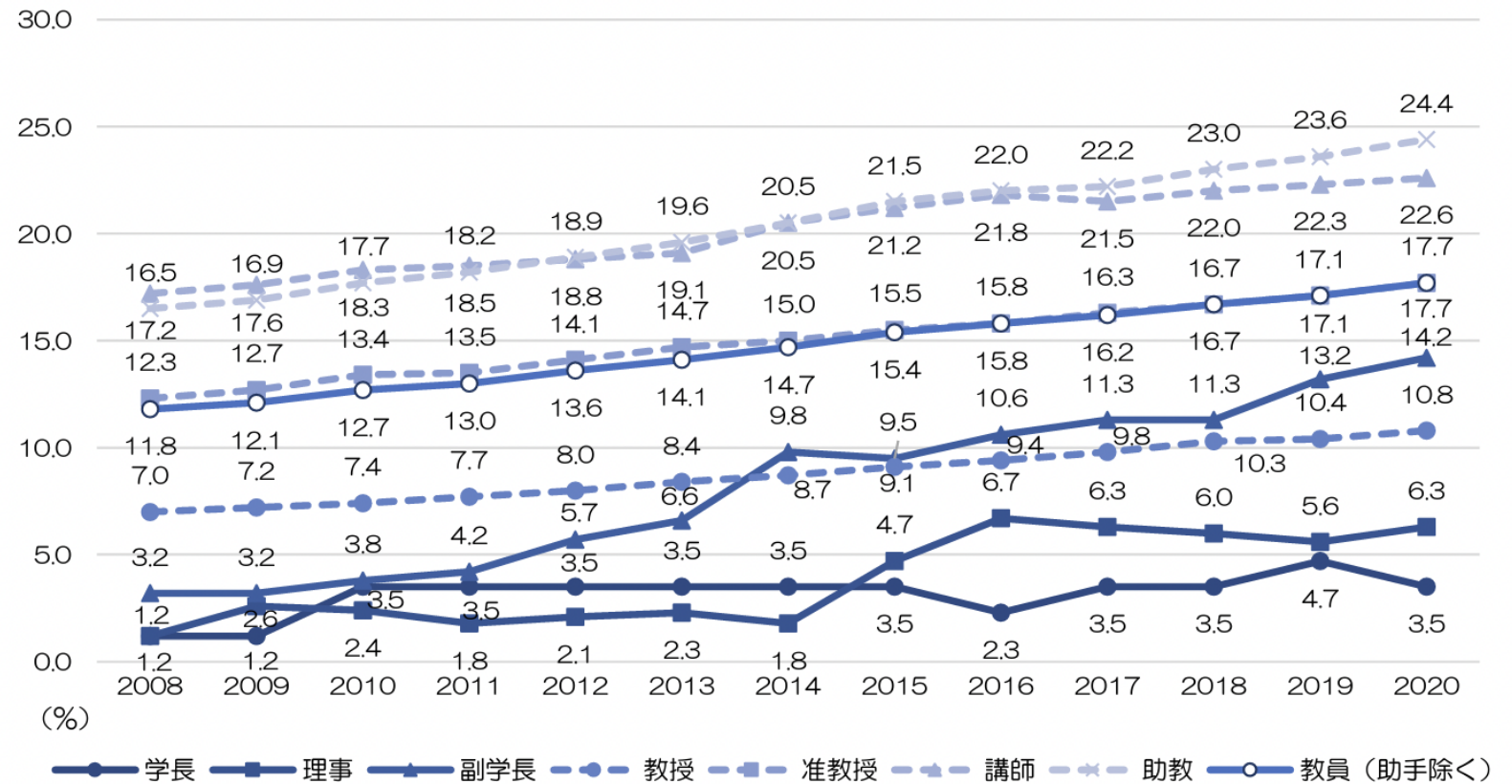
---



# 国立大学女性教員・学長比率

- 国立大学（86校）で女性学長は3名のみ（3.5%）（2021.10現在）
- 学長の女性比率：  
国立大学4.7%、  
公立大学20.4%、  
私立大学11.9%  
（2019年現在、毎日新聞による）
- 国立大学では教授の女性比率10.8%、女性教員17.7%

## 3-7. 学長・理事・副学長・教員の女性比率の推移



(出典) 国立大学協会 教育・研究委員会 男女共同参画小委員会 『国立大学における男女共同参画推進の実施に関する追跡調査報告書』

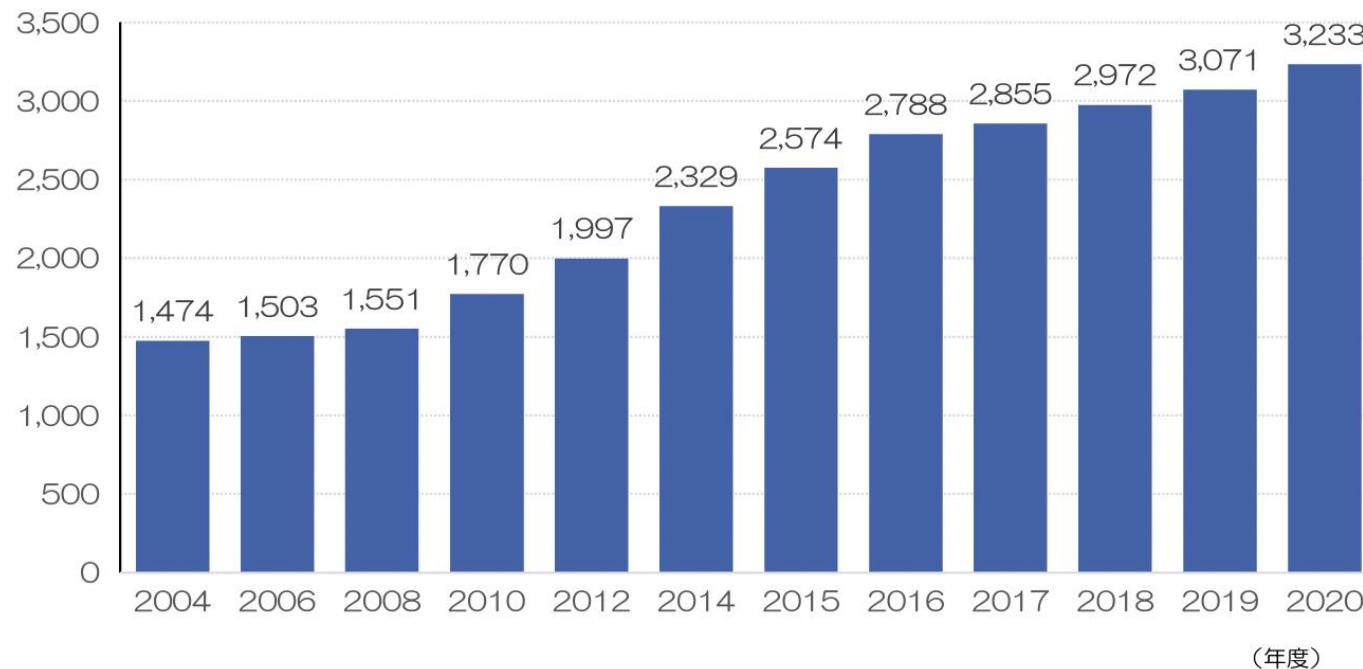
(各年) より国立大学協会事務局作成



# 国立大学における外国人教員数・比率

## 10-3. 外国人教員数

(単位：人)



	全教員数	外国人教員比率
2005	60937	約2.4%
2020	64076	5.0%

(注1) 国立大学のみ値。

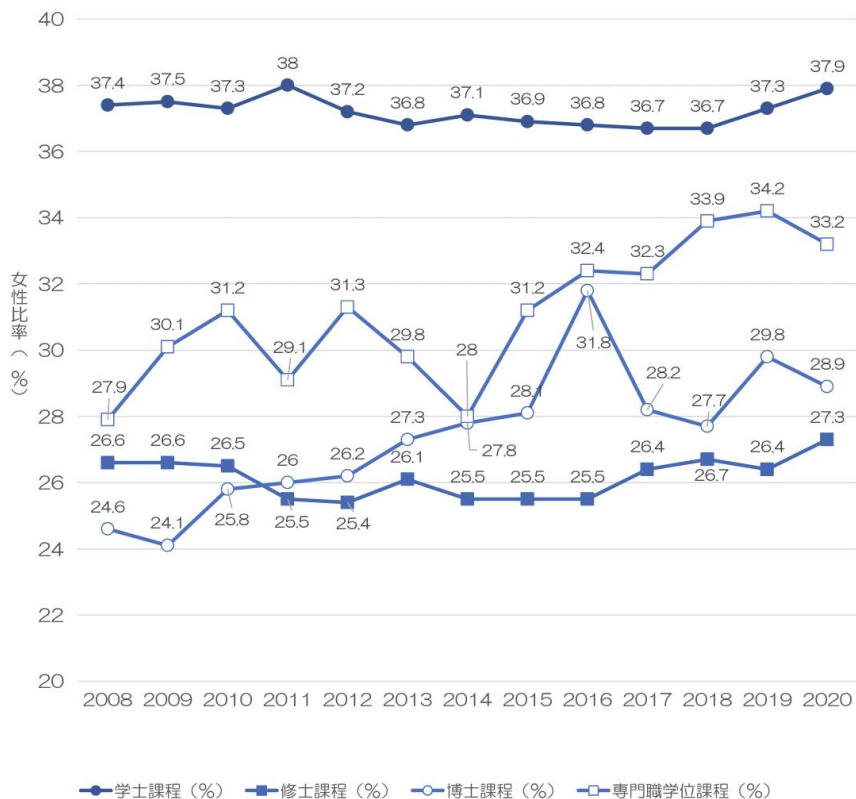
(注2) ここでは「学校基本調査」の教員(本務者)を対象とする。

(出典) 文部科学省「学校基本調査」(各年)より国立大学協会事務局作成

国立大学協会「国立大学の概要」  
<https://www.janu.jp/univ/gaiyou/>

# 学生の女性比率

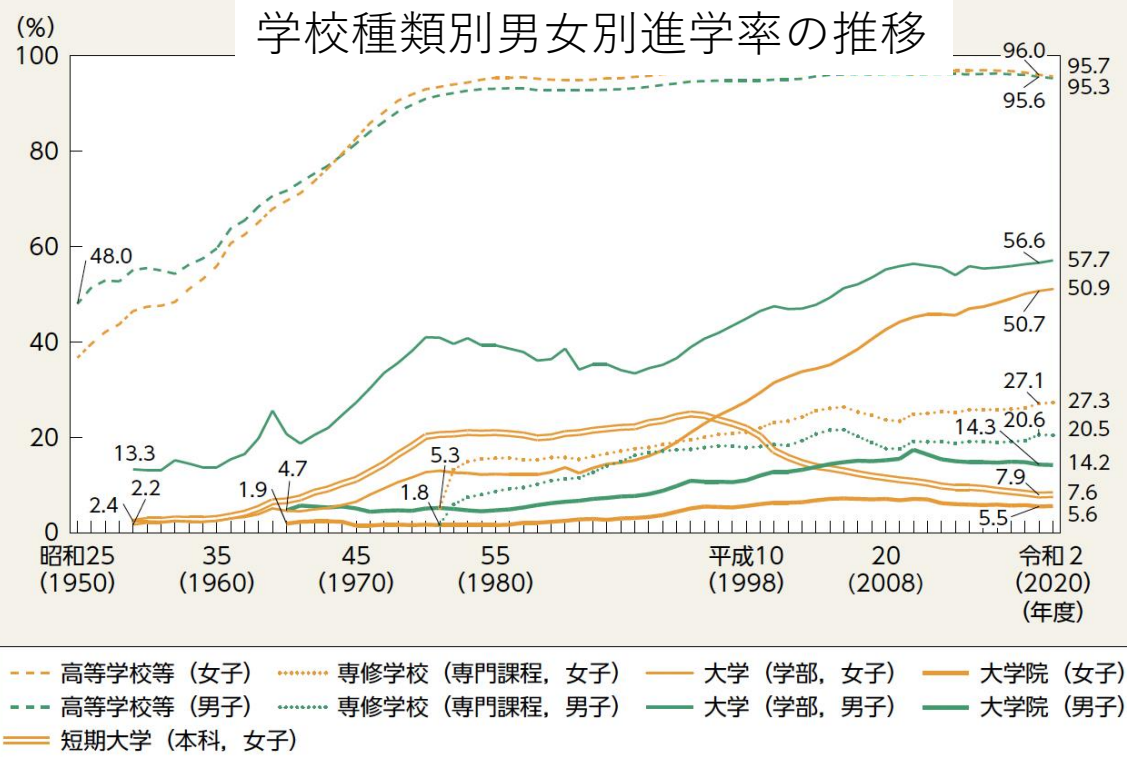
## 国立大学生の女性比率の推移



(注1) 修士課程は「修士課程及び博士前期課程(医・歯学・薬学・獣医学を除く、一貫制博士課程を含む。)」としている。  
 (注2) 博士課程は「博士後期課程(医・歯学・薬学・獣医学の博士課程を含む。)及び一貫制博士課程」としている。  
 (出典) 国立大学協会 教育・研究委員会 男女共同参画小委員会『国立大学における男女共同参画推進の実施に関する追跡調査報告書』(各年)より  
 国立大学協会事務局作成

国立大学協会「国立大学の概要」  
<https://www.janu.jp/univ/gaiyou/>

I-5-1 図 学校種類別進学率の推移

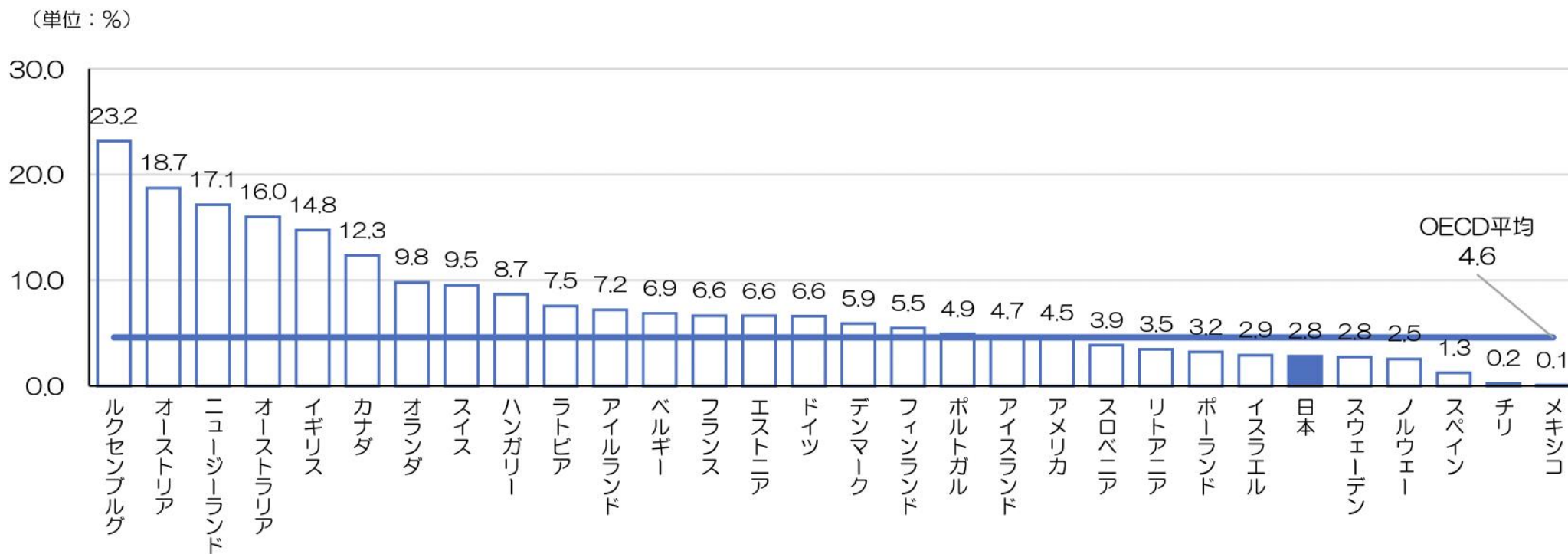


- (備考) 1. 文部科学省「学校基本統計」より作成。  
 2. 高等学校等への進学率は、「高等学校、中等教育学校後期課程及び特別支援学校高等部の本科・別科並びに高等専門学校に進学した者(就職進学した者を含み、過年度中卒者等は含まない。)/「中学校・義務教育学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者」×100により算出。ただし、進学者には、高等学校の通信制課程(本科)への進学者を含まない。  
 3. 専修学校(専門課程)進学率は、「専修学校(専門課程)入学者数(過年度高卒者等を含む。)/「3年前の中学校・義務教育学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者」×100により算出。  
 4. 大学(学部)及び短期大学(本科)進学率は、「大学学部(短期大学本科)入学者数(過年度高卒者等を含む。)/「3年前の中学校・義務教育学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数」×100により算出。ただし、入学者には、大学又は短期大学の通信制への入学者を含まない。  
 5. 大学院進学率は、「大学学部卒業後直ちに大学院に進学した者の数」/「大学学部卒業生数」×100により算出(医学部、歯学部は博士課程への進学者)。ただし、進学者には、大学院の通信制への進学者を含まない。

内閣府『令和3年度版男女共同参画白書』

# 大学学部生における留学生比率

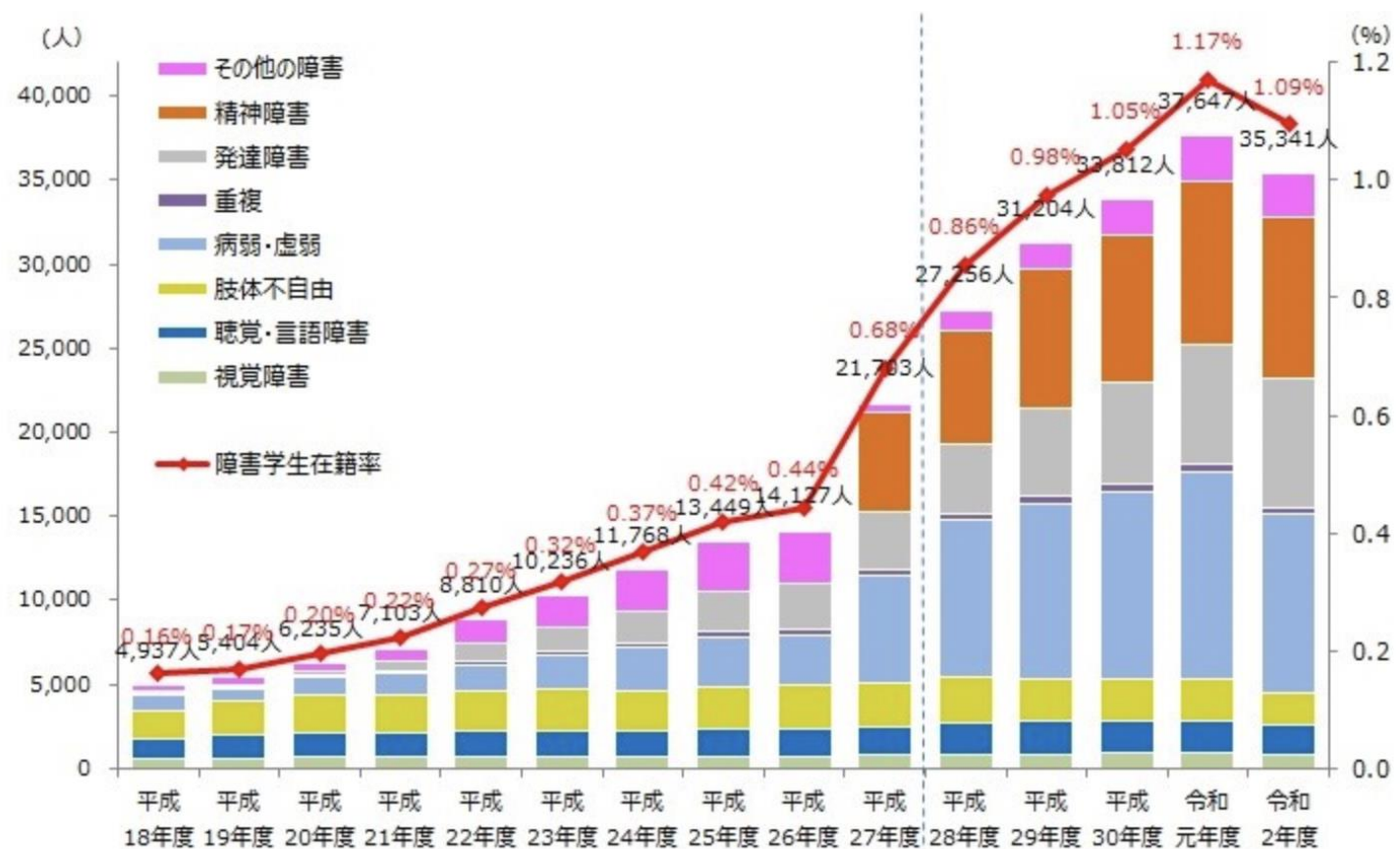
## 10-14. 学士課程に在学する留学生の割合の国際比較 (2018)



(注) このデータには定義上、留学生の入学者が含まれている。  
(出典) OECD「Education at a Glance 2020」より国大協事務局作成

国立大学協会「国立大学の概要」  
<https://www.janu.jp/univ/gaiyou/>

# 障害のある学生数・比率

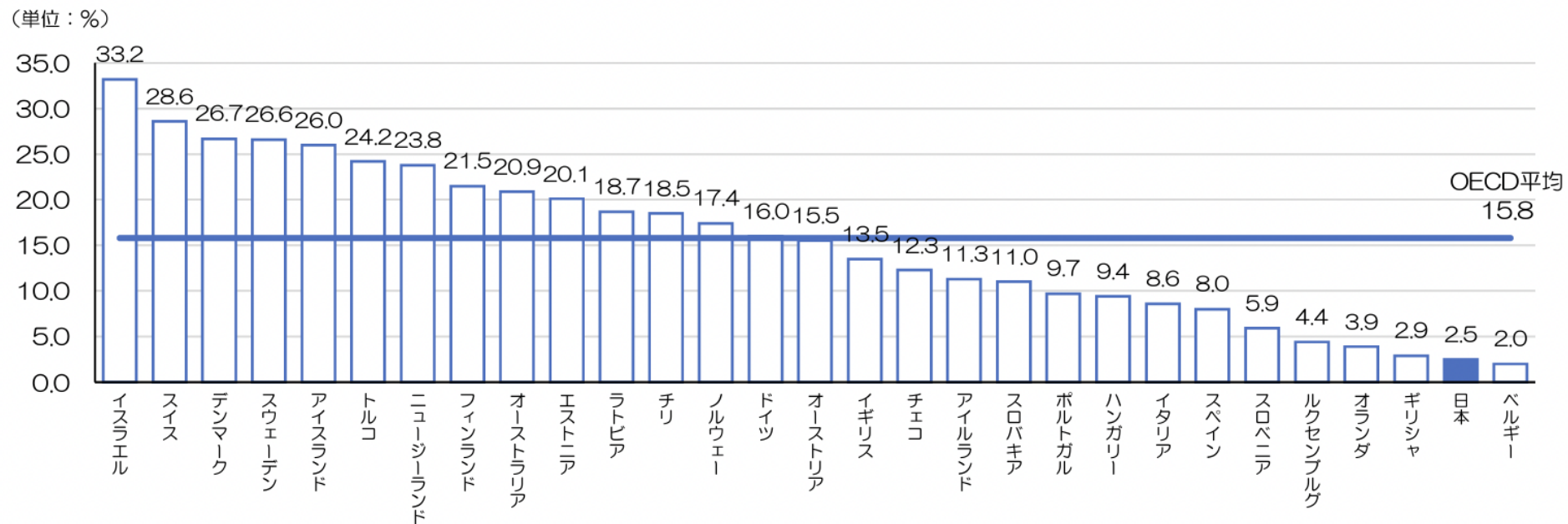


参考：H.28障害者差別解消法施行

日本学生支援機構「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」  
[https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_shogai\\_syugaku/index.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/index.html)

# 25歳以上の大学入学者比率

## 10-11. 25歳以上の学士課程への入学者の割合の国際比較（2016）



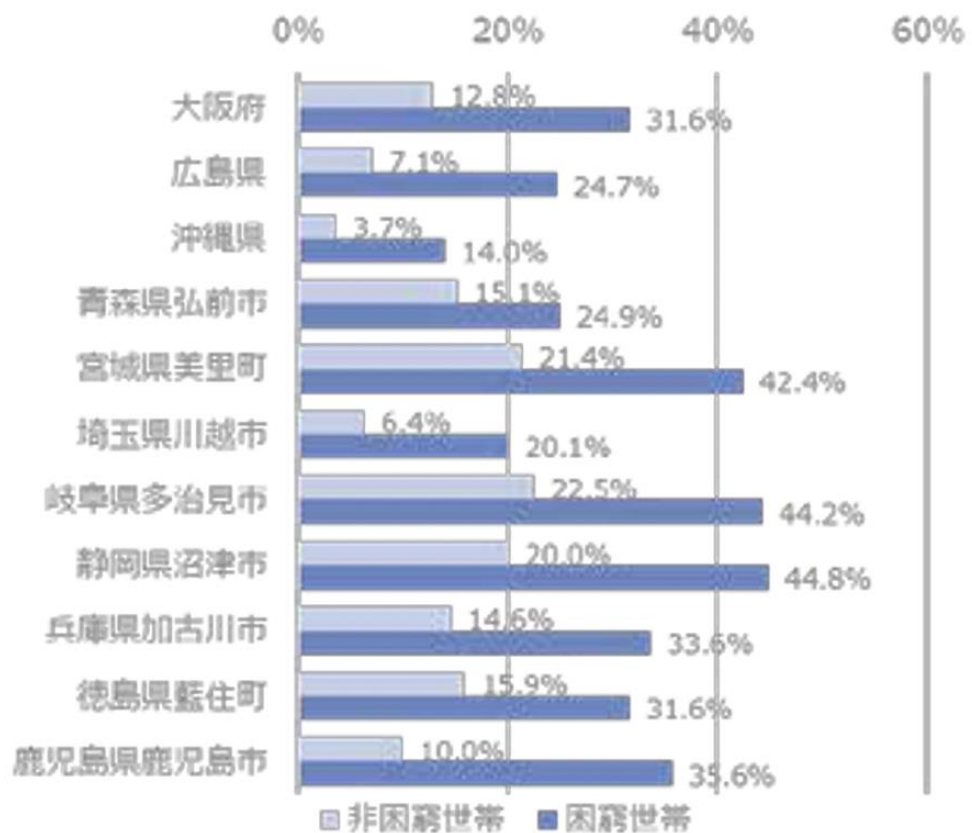
(注1) 日本以外の諸外国の数値については、高等教育段階別の初回入学者の割合。

(出典) 文部科学省「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(答申) 参考資料より国立大学協会事務局作成  
(元データ) OECD「Education at a Glance 2018」及び文部科学省「学校基本調査」(2016)

国立大学協会「国立大学の概要」

<https://www.janu.jp/univ/gaiyou/>

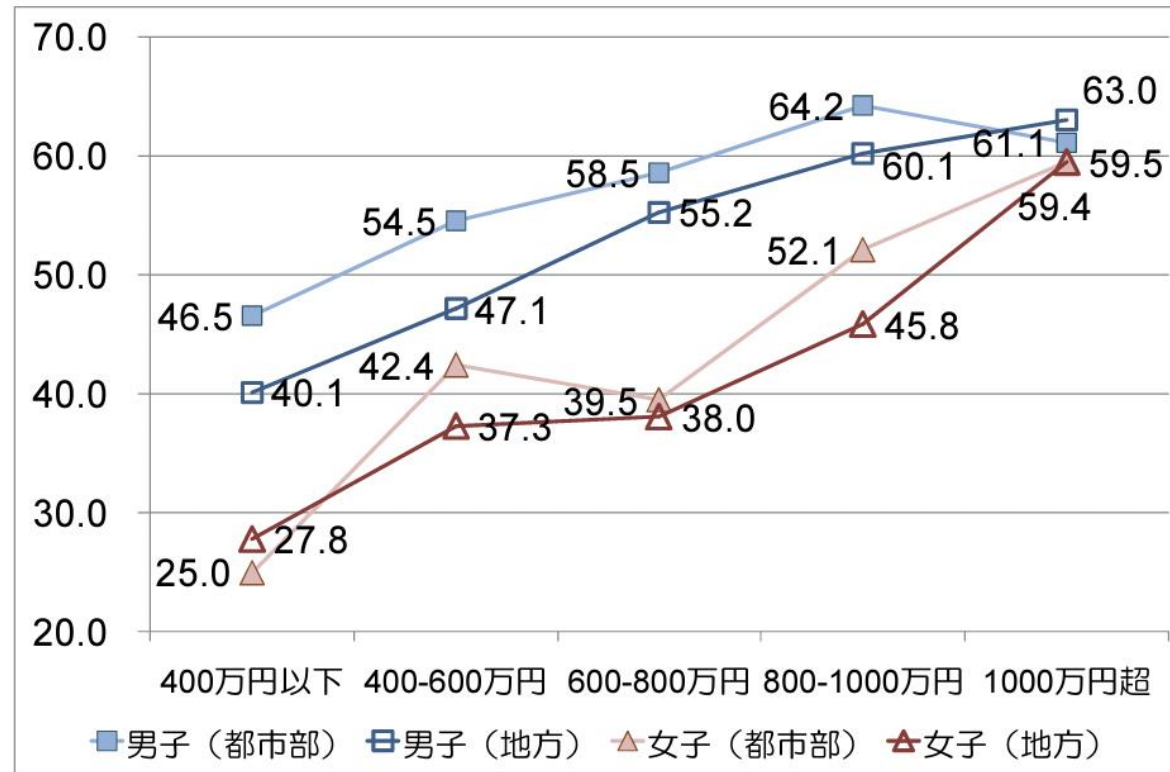
# 経済的環境



※各自治体の調査結果を再集計したもので、自治体ごとに調査における前提条件が異なる。

図表 2-9 子に受けさせたい教育段階として、中学・高校までと回答した割合

# 経済的困窮・ジェンダー・地域の交差性



無回答を除く。「都市部」は埼玉・千葉・東京・神奈川・愛知・京都・大阪・兵庫の8都府県。「地方」はそれ以外の39道県。

図 3-3 4年制大学への進学予定者の割合（両親年収別、性別・地域別）

# 日本の大学におけるダイバーシティ まとめ

---

- 大学の教員、学生ともに
  - 外国籍の構成員はごく少数
  - ジェンダー分布に偏りがある
  - 障害のある人の割合も少ない
- 学生は
  - 年齢
  - 家庭環境（保護者の年収、学歴等）
  - 出身地域なども同質である可能性が高い



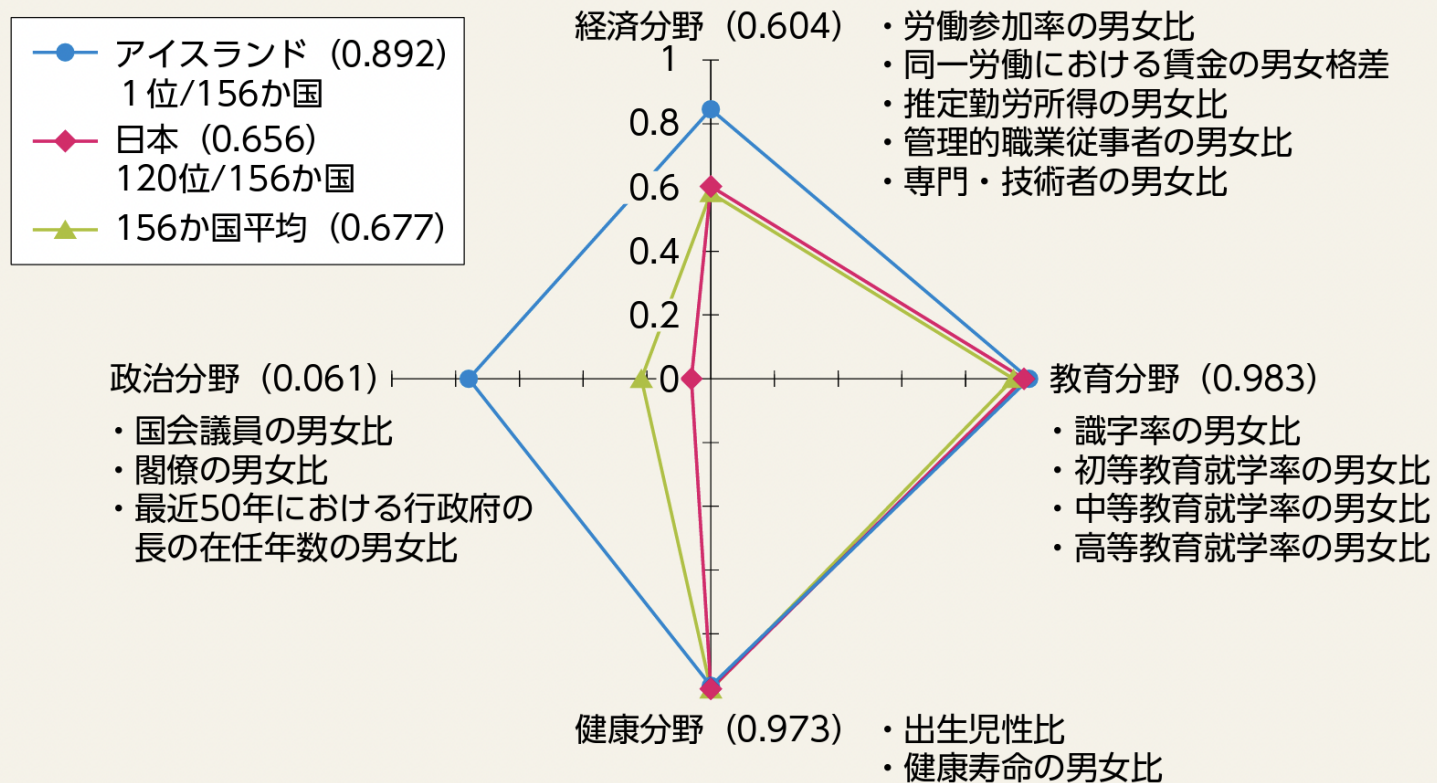
# ダイバーシティ 教育の重要性

---



# ジェンダーギャップ指数

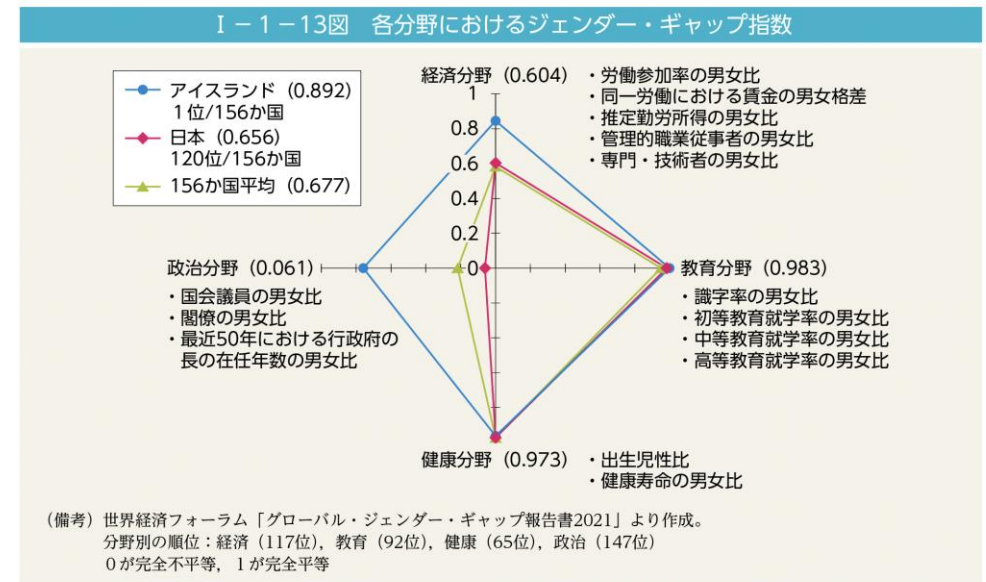
I-1-13図 各分野におけるジェンダー・ギャップ指数



(備考) 世界経済フォーラム「グローバル・ジェンダー・ギャップ報告書2021」より作成。  
分野別の順位：経済 (117位), 教育 (92位), 健康 (65位), 政治 (147位)  
0が完全不平等, 1が完全平等

# ジェンダーギャップ指数の意味？

- 日本のジェンダーギャップ指数は
  - 教育分野(0.983)、健康分野(0.973)は比較的高い
  - 政治分野で極めて低く(0.061)、経済分野でもかなり低い(0.604)
- 教育（特に高等教育）の成果が、女性に限って、社会（政治経済分野）での活躍につながっていない可能性



# ジェンダーギャップと教育

---

- 社会の側の問題
    - 女性の活躍を歓迎しない文化
    - 女性に多いライフスタイルに合致しない働き方が求められる (e.g. 残業、転勤)
    - 家事、育児、介護など女性に偏りがちな負担
    - アンコンシャスバイアス (採用や昇進の「壁」)
  - 教育の側の問題
    - ダイバーシティに欠ける環境
    - 「偏り」に気づき、「偏り」から解放される場を提供する必要
- ↓
- 教育が変われば、将来の社会が変わる

# リベラルアーツ教育

---

- 気づかないところでさまざまな制約を受けている思考や判断を解放させること、人間を種々の拘束や制約から解き放って自由にするための知識や技芸がリベラルアーツである

「東京大学後期教養教育立ち上げ趣意書」

- 思考の制約：無意識の前提、「自分にとっての当たり前」
  - 「制約」となっている「無意識のうちの前提」に気づくこと
  - その「制約」から思考・判断を解放する力をもつこと
  - 「他者」と出会い、理解しようと努力することによって、自己を相対化する力

# 思考の制約となる無意識のバイアス

---

- 少年とその母親が交通事故に遭う
- 母親は即死し、少年は重症で病院に搬送
- 救急救命室の看護師が、運び込まれた少年を見て、Oh my god, this is my son!と叫ぶ
- 看護師と少年の関係は？

# 無意識のバイアスのテスト

- Harvard Implicit Association Test (人種、ジェンダー、年齢、など様々な「無意識のバイアス」、以下はジェンダーの例)

<https://implicit.harvard.edu/implicit/japan/>

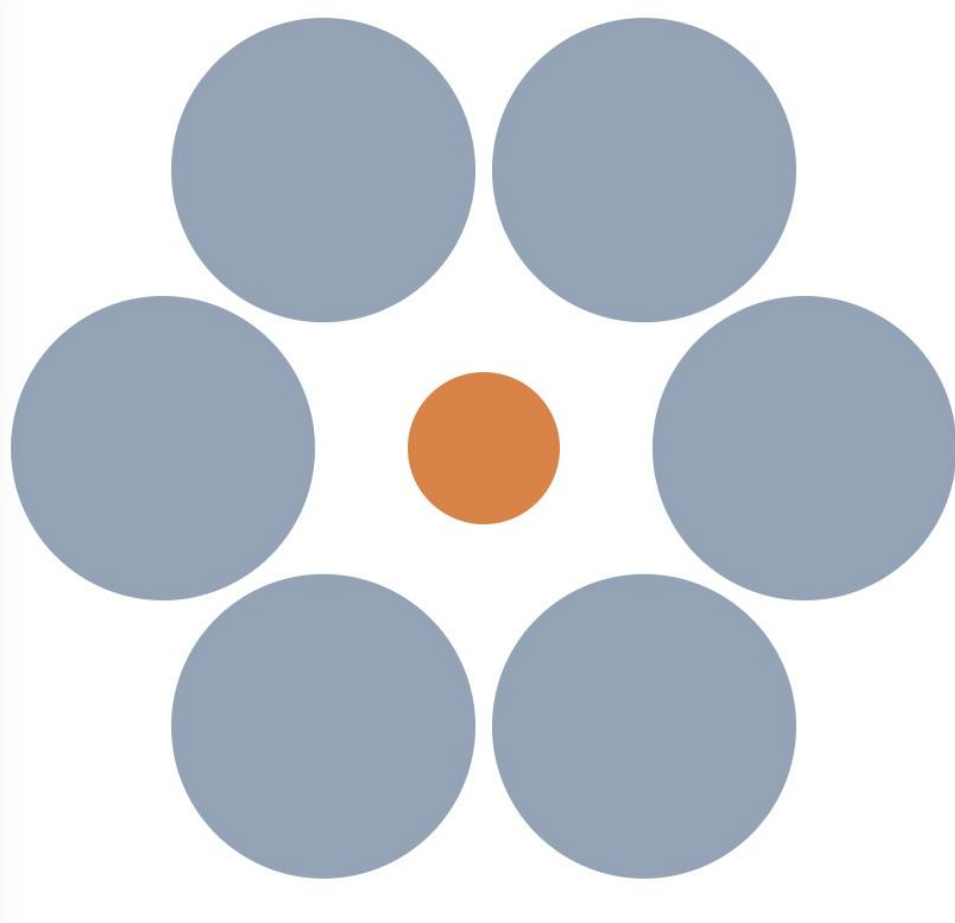
キー押し課題      A「女性or人文学」ならe, 「男性or科学」ならi  
                          B「女性or科学」ならe, 「男性or人文学」ならi

AとBで反応時間を比較

カテゴリー	項目
女性	少女、女性、おばさん、娘、妻、女、母親、おばあさん
男性	男、少年、父親、男性、おじいさん、夫、息子、おじさん
人文学	哲学、人文学、芸術学、文芸、英語学、音楽、歴史学
科学	生物学、物理学、化学、数学、地質学、天文学、工学

無意識の認識は意識では（容易には）  
変えられない

---





# ダイバーシティ教育の意味

---

- 自分が、何らかの既成概念や無意識のうちのステレオタイプに縛られていることを、認識することが重要
- 意識的な理解によって無意識のバイアスを変えることは難しい、ということも認識することが必要
- そのことを踏まえた、意識的な思考・判断を心がける
- 異なるものを尊重する姿勢

# 同質性の中でのダイバーシティ教育

---

- 同じ立場で共に活動する「仲間」が多様であるのが最も効果的
- それがかかわらない環境で、どのような教育をするか
- 幼い時期から多様性が少ない環境
  - 「母語」としての獲得ができない
  - 理論的、知識面の体系的な教育 + 実践経験を提供する演習形式

# 理論編 + 実践編

---

- 理論編は、専門家による体系的な講義
  - アンコンシャスバイアス
  - ジェンダー
  - エスニシティー
  - 障害の社会モデル
  - 性的自認と性指向 (LGBTQ)
  - . . .
- 実践編は、それぞれの教員の専門に引きつけて、演習的に行う

# 実践演習に 向けてのヒント

---



# 留学・国際交流体験

---

- 異なる文化背景をもつ人との、「共通点」と「相違点」を知る
- 「自分の当たり前」は、「みんなの当たり前」なのか？
- マイノリティの立場に身を置く経験

# リベラルアーツとしての外国語教育

---

- 外国語（特に英語）の教育は「技能」習得が着目されがち
- 外国語の学習には、母語と異なる体系を知ることの意味がある
  - モノリンガル環境で育った子供にとって、母語は絶対的なシステム
  - 外国語を学ぶことで初めて異なるシステムに出会う
  - 母語と外国語の間を往還することで、母語のシステムを相対化できる
    - 語彙・文法の体系の相違
    - 表面的な相違の背後にある共通性
    - 母語の体系の理解も、外国語を学ぶことで深まる
- 言語は、世界を「切り取る」枠組みを与える
  - 母語の相対化 = 世界把握の枠組みの相対化

# 異なるシステムとしての外国語（表記）

---

- 漢字＋カナ表記 vs. アルファベット表記
- アルファベット表記（子音と母音を分解）によって日本語についてわかることもある

# 日本語の動詞語幹 + 助動詞

---

日本語の動詞 + 助動詞レル・ラレル (なつかれる、ほめられる)

五段動詞：未然形 + レル、一段動詞：未然形 + ラレル

活用で変化しない部分を語幹と定義すると、

「なつく」の語幹はnatuk-、「ほめる」の語幹はhome-

レル・ラレルは、-(r)areru; 子音が連続する場合にはrが削除される  
natuk-(r)areru vs. home-rareru (なつかれる、ほめられる)

セル・サセルも同様に、-(s)aseru

natuk-(s)aseru vs. home-saseru (なつかせる、ほめさせる)



# 異なるシステムとしての外国語（表現）

---

- 簡単な表現でも、訳すのは難しい

(例) (i) give a presentを日本語に訳したら？

(ii) 「教授が手を洗った」を英語に訳したら？

(i)は、贈り手と貰い手の関係によって、「あげる（差し上げる）」、「くれる（くださる）」、「与える」が使い分けられる。

(ii)は、教授の性別を特定する必要がある  
(washed her/his hands)

# 意外な共通点

---

- 動詞の過去形：英語(-ed)、日本語 (-た、-だ)
  - edの発音は3種類：[t], [d], [ɪd]
  - 日本語の過去形態素の発音は2種類：[ta] [da]
  - 「書いた vs. 嗅いだ」 「解いた vs. 研いだ」
  - 「書く vs. 嗅ぐ」 「解く vs. 研ぐ」
  - lock/locked [t] vs. log/logged [d]
  - peck/pecked [t] vs. peg/pegged [d]

# 手話

---

- ろう者の集団で母語として用いられる言語
- 手の動き・表情などの「視覚情報」を用いる点が、「聴覚情報」を用いる音声言語との大きな相違
- アメリカ手話、中国手話、日本手話など、世界各地で用いられている
- アメリカ手話はフランス手話の系統であるなど、歴史的な偶然を反映した「系統」がある

# 手話と教育

---

- Gallaudet University (アメリカ手話・英語の二言語併用)
- 米国の大学における言語科目学習の割合
  - 2009年MLA調査で西、独、仏に次ぐ4位の学習者数
- 日本では大学で日本手話を語学として教える大学は少数派
  - 慶應、四国学院、東京外語、東京経済大、東大、日本社会事業大、立教、愛知医科大、関西学院 (松岡ら2018、伊藤2012)
  - 鳥取大学医学部では基礎手話が必修、医療手話が選択科目 (大熊2021)

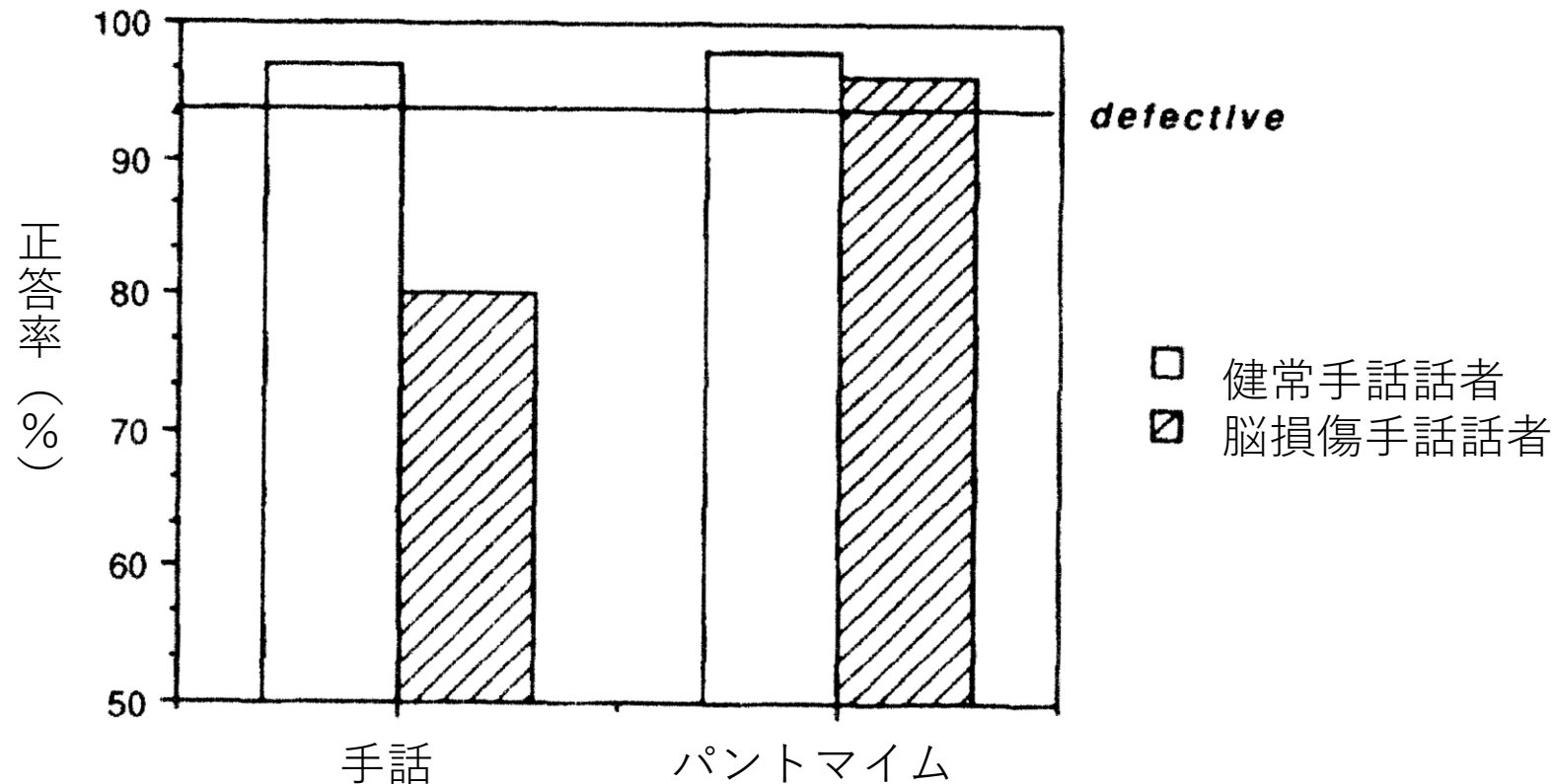
# 日本の手話

---

- 日本手話と日本語対応手話（手指日本語）
- 日本手話：ろうの子どもが母語として獲得する自然言語（話者約6万人）
- 日本語対応手話：日本語の文法で、手指によって表現する単語を用いる。日本手話を母語とする人には理解が難しいと言われる反面、中途失聴者にはわかりやすい

# 手話は、言語か、非言語コミュニケーションか

左半球損傷手話話者の、手話・パントマイム理解課題



(Corina et al. 1992)

# 手話と音声言語の相違点と共通点

---

- 音声言語に比較して、手話には恣意的でない記号が多い
- 手話も音声言語同様に、左半球の言語野を用いて処理されている
- 手話にも音声言語同様に、臨界期があると考えられる
  - 10歳以上になって接すると文法体系の獲得が困難 (Senghas & Coppola 2001)

# 記号の恣意性

- 言語記号の音と意味の関係は基本的に恣意的である (cf. オノマトペ)



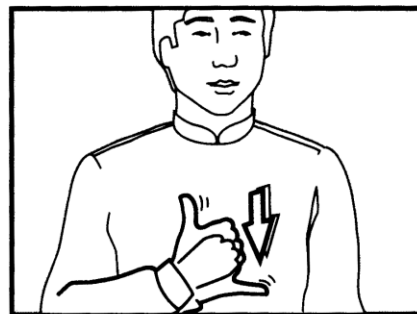
FATHER (ASL)



FATHER (CSL)



SUSPECT (ASL)

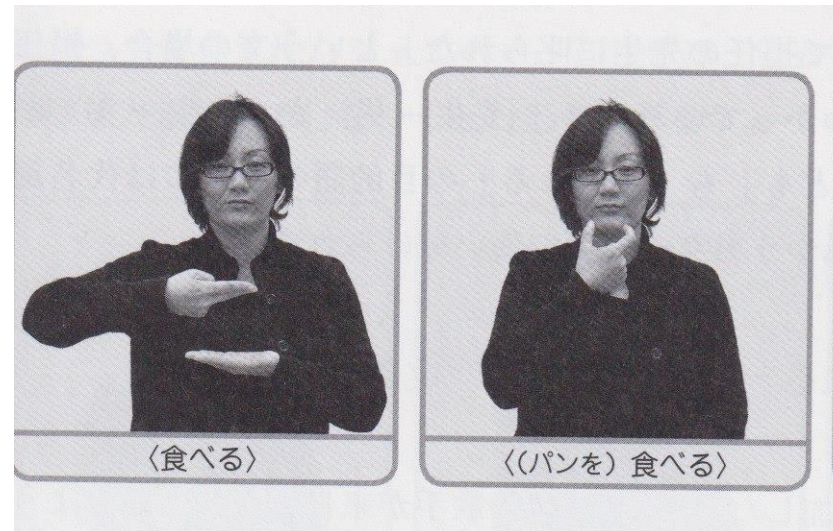


SUSPECT (CSL)

アメリカ手話(ASL)と中国手話(CSL)の「父親」と「疑う」(Poizner et al. 1987)



アメリカ手話の「食べる」  
(Poizner et al. 1987)



日本手話の「食べる」 (岡・赤堀 2011)



# 多様性と普遍性の「見直し」

---

- 言語記号の恣意性は、自然言語に共通の性質か？
  - 音声による記号という特性からくる制約である可能性
    - 音声で、音声以外のモノ・コトを有契性をもって（=恣意的でなく）表現するのはむずかしい（cf.擬態語）
- 音声言語と手話の共通点は自然言語に共通の性質と考えられる
  - 左脳言語野（失語症状）
  - 臨界期
- 脳内処理には共通点と相違がある
  - 音声を用いることからくる特徴と、自然言語共通の特徴とを切り分けられる可能性



言語の本質を問い直す契機

# ダイバーシティ教育としての日本手話

---

- 聴覚vs視覚という根本的な相違
  - 言語についての「当たり前」を覆される経験
- 日本国内で用いられるマイノリティ言語
- ろう者の言語：言語以外の側面でのマイノリティの文化に触れることもできる

# 「違う体系」への気づき

---

- 異なる体系について学ぶことで、異なる視点の存在に気づく
- 自分が前提にしていることが、他の人にも当然の前提にはならない可能性を知る
- 異なる体系を知ることで、自分の体系への理解も深まる
- 表面的な相違の背後にある共通点を見出す力も養成される

# 教育におけるダイバーシティの主流化

---

- 「ジェンダー主流化」：あらゆる施策や取り組みにジェンダー平等とジェンダーの視点を反映する
- 教育におけるダイバーシティ主流化
  - あらゆる科目に、ダイバーシティの視点を反映する
  - さまざまな科目で、さまざまな形で、ダイバーシティが取り上げられることが重要



# まとめ

---

- 大学の現状：同質性（ジェンダー、国籍、障害、家庭環境）
- 異質なものを尊重し、理解しようとする姿勢の重要性
- 暗黙の前提から解放するリベラルアーツ教育
- 体系的に知識を伝える講義と、実践的に「違い」を体験するタイプの授業の組み合わせ
- リベラルアーツ教育としての国際交流、言語教育
  - 異質なものへの敬意
  - 自己理解の深化
  - 「相違」の背後に共通点を見出す力
- さまざまな専門に「ひきつけた」形でのダイバーシティ教育
  - ダイバーシティ教育の主流化を目指す

# 引用文献

---

- Corina, D. et al. (1992) “Dissociation between linguistic and non-linguistic gestural systems: A case for compositionality,” *Brain and Language* 43, 414-447.
- Poizner, H. et al. (1995) *What the hands reveal about the brain*. MIT Press.
- Senghas, A. & M. Coppola “Children creating language: How Nicaraguan Sign Language acquired a spatial grammar,” *Psychological Science* 12, 323-328.
- 伊藤たかね(2012)「日本手話開講によせて」『教養学部報』550, <https://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/about/booklet-gazette/bulletin/550/open/B-3-1.html>
- 大熊理恵子(2021)「なぜ“障害の社会モデル”の視点が重要なのかー公正な医療に向けた薬学教育とはー」『薬学教育』5, 1-9, doi:10.24489/jjphe.2020-030
- 岡典栄・赤堀仁美(2011)『文法が基礎からわかる 日本手話のしくみ』大修館書店
- 松岡和美ら(2018)「大学における日本手話クラスの現状と課題ーマイノリティの言語と文化への理解を促す授業ー」『複言語・多言語教育研究』6, 60-71.

## 令和3年度 部会活動報告書

部会名	国語	記入者名	鎌田雅子																				
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6 / 4 附属中学校春季公開研究協議会（オンライン）</li> <li>・ 6 / 18 附属小学校公開研究協議会（オンライン）</li> <li>・ 11 / 12 附属中学校秋季公開研究協議会（オンライン）</li> <li>・ 1 / 29 特別支援学校公開研究協議会（オンライン）</li> </ul> <p>上記研修会等に向けて、学部と連携して阿部昇先生、成田雅樹先生に、山崎義光先生に、教材選定、教材分析、事前事後指導検討会等で、ご指導いただきながら授業作りを進めることができた。</p> <p>今年度は新型コロナウイルス感染防止対策を取りながらオンラインで上記研究会を開催することができた。</p> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6月 附属中学校春季公開研究協議会（オンライン）</li> <li>・ 6 / 10 附属小学校公開研究協議会（オンライン）</li> <li>・ 附属特別支援学校公開研究協議会</li> <li>・ その他校内研修・オープン研修会など</li> <li>・ 学部教員による特別講座や入門講座の開催の検討（附属中）</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 副部長・書記のローテーションは次の通り</li> </ul> <table style="margin-left: 20px; border: none;"> <tr> <td>2019年度</td> <td>副部長：小</td> <td>書記：特</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2020年度</td> <td>副部長：特</td> <td>書記：中</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2021年度</td> <td>副部長：中</td> <td>書記：小</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2022年度</td> <td>副部長：小</td> <td>書記：特</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2023年度</td> <td>副部長：特</td> <td>書記：中</td> <td>・・・</td> </tr> </table> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>部会長： 学部 志立正知</p> <p>副部長：附属小 進藤由貴子</p> <p>書記： 特支 菅原美智</p>				2019年度	副部長：小	書記：特		2020年度	副部長：特	書記：中		2021年度	副部長：中	書記：小		2022年度	副部長：小	書記：特		2023年度	副部長：特	書記：中	・・・
2019年度	副部長：小	書記：特																					
2020年度	副部長：特	書記：中																					
2021年度	副部長：中	書記：小																					
2022年度	副部長：小	書記：特																					
2023年度	副部長：特	書記：中	・・・																				

令和3年度 部会活動報告書

部会名	数学	記入者名	阿部文勇
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p>			
<p>11月12日(金)</p>			
<p>秋季公開研究協議会(1年数学:単元平面図形)</p>			
<p>今年度の公開研究協議会では、18名の参加者をお迎えして、オンラインによる公開研究協議会が行われた。本時では、おうぎ形の面積を中心角等と比べながら、比例関係に着目する内容であった。今回の考え方の根底にある関係性に何に着目させて気付かせるかが重要であった。今回の比例関係は、生徒にとってある意味自明の関係であったため、その重要性に気付くことがなかなか難しかった。割合という考え方に固執してしまった生徒もいたため、始めに提示した、円とおうぎ形の関係を示す掲示物をもっと活用できればよかったと感じている。また、比例を使って考察する必要感が生徒にもっと示すことが重要であった。様々な考え方に共通することが何かや、どの方法が一番良いのかということを探る中で、一般化する時に比例が必要であることに気付かせる工夫が今後大切であった。多くの参加者から貴重なご意見を頂き、来年度の公開研究協議会に生かしていきたい。</p>			
<p>3月</p>			
<p>授業を見合う会(来年度の公開に向けての、研究の方向性の確認)</p>			
<p>今年度の研究の成果と課題から来年度の研究の方向性を「授業を見合う会」で示していく。具体的な内容としては、下の&lt;次年度の課題&gt;に関わる内容を示していく。</p>			
<p>6月4日(金) 小学校公開研究協議会(3年算数:単元名 わり算名人になろう!)</p>			
<p>オンラインによる公開研究協議会が行われた。仲間との対話を通して、数学の有用性、簡易性、能率性など様々な視点から自分の考えを見直し、自ら問題に働きかけ、数学のよさに気付く子どもの姿が見られた。</p>			
<p>9~10月 小学校6年「データの見方」領域の授業改善</p>			
<p>小学校算数科の重要な課題となっている新学習指導要領で新設された「データの活用」領域の授業改善に向けて、学習指導における児童に生じる困難性とその困難を解決するための具体的な方策について、加藤慎一先生からご指導を頂いた。</p>			
<p>10月19日(火) 小学校第2回校内研修会(6年算数:単元名 比例と反比例)</p>			
<p>2月24日(月) 小学校第4回校内研修会(2年算数:単元名 1を分けて)</p>			
<p>子ども自身が問題に働きかけ省察を通して数学のよさに気付く姿を目指し、研究授業を行った。数学のよさを比較検討するための尺度をもち、多様な思考を一般化していく姿を引き出すための単元構成や展開の工夫に課題があることが分かった。</p>			
<p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p>			
<p>中学校公開研究協議会・・・6月10日(金)</p>			
<p>今年度は、数学の学習のプロセスを提示し、さらに数学の見方・考え方を示してきた。ただ、生徒にとって学習の展開の中で、どの部分がどのような数学的な見方・考え方なのかが曖昧であった。来年度、「問い直し」から「一斉学習」になる段階で、どのように授業をコーディネートしていくかが課題である。また、ICTの活用は継続的に行っていきたい。その上で、協働的な学習とICTを活用した個別学習をどう融合するかが今後の課題である。</p>			
<p>小学校公開研究協議会・・・6月10日(金)</p>			
<p>研究テーマ「学びから生まれる新たな問いをもとに、協働的な学びを通して数学のよさを実感する子どもを育む学び」(仮)のもと、実践・研究を進めていきたい。</p>			
<p>&lt;次年度の体制&gt;</p>			
<p>部会長 加藤 慎一</p>			
<p>副部会長 菅原 恵</p>			
<p>書記 高桑 和哉</p>			



令和3年度 部会活動報告書

部会名	理科	記入者名	石井照久 (教育文化学部)
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p>			
<p><b>附属小学校</b></p>			
<p>○6月18日にリモートで実施した公開研究協議会において、附属小の福田が「風やゴムで動かそう」(3年)の授業実践を報告・発表した。研究協力者として学部の田口が、教材分析協力として林(正)が、それぞれ参加した。授業参観後に、附属小の福田、村上、柴田および学部の教員も加わり授業の検討を行った。当日に先立ち学部の田口から、提案授業の構成等について事前指導を行った。また、公開授業の分析を学部学生が大学での授業内に行った。</p>			
<p>○学部の田口が、プログラミング教育の授業を12月3日に4年生3クラスに1時間ずつ実施した。</p>			
<p>○2月9日に校内研修会を実施した。これに学部の田口が協力し、研究指導を行った。</p>			
<p><b>附属中学校</b></p>			
<p>○学部の田口が共同研究者として、リモートで地球領域気象分野の授業を3年生4クラスに1時間ずつ実施した(授業者は、宇都宮大学の瀧本先生)。</p>			
<p>○学部の田口の指導により、学部4年生の冨塚が、カードゲームを用いた電流に関する授業を3年生4クラスに1時間ずつ実施した。</p>			
<p>○6月4日にリモートで実施した春季公開研究協議会において、附属中の藤原が「金星の見え方」(3年)の授業実践を報告・発表した。研究協力者として学部の林(信)と原田が参加した。授業後に、学部の林(信)と原田に加え、附属の池田、菊地、藤原、学部の林(正)、岩田、清野、本谷、田口、石井も加わり、授業の検討を行った。</p>			
<p>○11月12日にリモートで実施した秋季公開研究協議会において、附属中の池田が「陰極線の性質(ICTを活用して)」(2年)の授業実践を報告・発表した。教材研究協力者として学部の林(信)と原田が参加した。授業後に、学部の林(信)と原田に加え、附属の池田、菊地、藤原、学部の林(正)、清野、本谷、田口、石井も加わり、授業の検討を行った。</p>			
<p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p>			
<p>今年度は、感染症予防対策を継続しながら、対面授業を実施することができ、ICTの授業への導入回数も確実に増えてきた。次年度は、ICTの使い方のバリエーションをさらに増やしていけるように、大学と附属とで連携を強めたい。また、リモートを活用した公開授業などでは、児童生徒の個人のタブレット画面を、個人情報流出に最新の注意を払いながら、共有できるように、大学側からサポートを行いたい。</p>			
<p>さらに、コロナ禍により今年度実施できなかった、理科の教員による、附属中学生への放課後の出前講座をリモート授業か対面授業で次年度実施したい。</p>			
<p>附属小と附属中で毎年実施されている学部学生の教育実習について、実習生の様子について、これまで以上に、大学と附属間で情報共有を行いたい。</p>			
<p>&lt;次年度の体制&gt;</p>			
<p>部会長：石井照久</p>			
<p>副部会長：未定</p>			
<p>書記：藤原正貴</p>			

部会名	音楽	記入者名	吉澤 恭子
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>附属学校園と大学が連携した取り組みとして、以下の教育・研究活動を実施した。</p> <p><b>【附属小学校】</b></p> <p>(1) 公開研究協議会（オンライン）の開催  日時：2021年6月18日（金）13:00-14:00  授業者：大山光子 研究協力者：吉澤恭子  対象：5年A組 単元・題材名「声のひびきを感じながら,合唱しよう」  教材：《ハロー・シャイニングブルー》(『音楽のおくりもの5』(教育出版)から)  研究協議会では、事前に研究授業(5月18日(金)13:30-14:15に実施)を録画、その後編集された実践動画が提示された。</p> <p>(2) 訪問演奏会に代わる鑑賞教材の制作（共同企画：吉澤恭子・大山光子）  県内の公立小学校において3週間の教育実習終了後に開始する3年後期では、これまで習得した音楽専門知識・技能に加え、応用的な実践力の育成を図る目的として、附属小学校において「訪問演奏会」を実施している。演奏会の企画・準備は附属小学校の授業実践状況も視野に入れつつ、3年後期開講科目「初等音楽」（担当：吉澤恭子）の授業内で行っている。昨年度に続き今年度も訪問演奏会の開催が叶わず、代替措置として演奏動画を制作した。テーマは「いろいろな音楽アンサンブル（歌唱，器楽）」、2021年11月末から12月初旬にかけて、演奏動画は小学3年生（全3クラス）の児童の音楽鑑賞の機会に役立てた。</p> <p><b>【附属中学校】</b></p> <p>4月に清水功一教諭が赴任した。昨年度に引き続き、大学と協働的な取り組みは、指揮、アンサンブル（合唱・合奏）、創作の分野において行われた。</p> <p>(1) 附属中学校芸術祭における合唱コンクール生徒指揮者講習会の実施  日時：2021年9月1日（水）、3日（金）（全クラスの指揮指導を実施）  会場：附属中学校 指導：石原慎司</p> <p>(2) 附属中学校芸術祭における特別オーケストラの演奏発表  日時：2021年10月11日（月）13:30- 会場：附属中学校 指揮・指導：石原慎司  曲目：シベリウス/《アンダンテ・デスティエーヴォ》、L・アンダーソン/《Plink Plank Plunk》  オーケストラの参加者数：生徒19名、教員2名、計21名</p> <p>(3) 秋季公開研究協議会（オンライン）の開催  日時：2021年11月12日（金）11:00-11:50  授業者：清水功一 共同研究者・助言者：石原慎司  対象：1年C組「いろいろな音階を使って旋律を作ろう」  ICTを活用しつつ、五音音階を用いた旋律創作を行った。</p>			

#### (4) 授業を見合う会（予定）の実施

日時：2022年3月15日（火）14:20-15:10 授業者：清水功一 助言者：石原慎司  
対象：1年B組「和楽器を楽しもう」 第1回目の箏の授業を予定している。

#### <次年度に向けた予定・課題等>

コロナ禍が与えた影響（課題）として、以下の点が挙げられる。

- ・ 飛沫感染防止対策により、歌唱実践、鍵盤ハーモニカ、リコーダー等の器楽実践の機会が制限され、児童・生徒共に、学習段階における音楽知識・技能を習得する機会が不十分である。このことから、音楽学習への児童・生徒のモチベーションをどのように維持していくべきか、教科独自の視点をふまえた授業のあり方や指導法の工夫を検討すべきである。

予定として、以下の点が挙げられる。

- ・ ICTを活用した中学校音楽科の実践について、創作領域へ視野を広げていくこと。
- ・ 大学4年生の副免許実習（指導：清水功一）において、ICTを活用した授業実践に関する指導の実施。
- ・ 附属中学校は、2022年6月3日（金）に公開研究協議会の開催が予定されている。
- ・ 大学と附属学校園の音楽実践交流の継続と教員間による共同研究の着手。

#### <次年度の体制>

部会長：吉澤 恭子（附属小学校担当）  
副部会長：石原 慎司（附属中学校担当）  
書記：大山 光子（附属小学校）

令和3年度 部会活動報告書

部会名	体育・保健体育	記入者名	松本 奈緒
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p>			
<p>1. 秋田大学附属小学校公開研究協議会 保健体育            授業者：佐藤秀恒（附小） 対象：小学校3年生 単元：ボール運動「ゴール型」            内容：「ボールを持たない動き」に焦点化したしっぽ取りゲーム中心の授業とタブレットで            作戦を振り返る授業            附属小共同研究者：伊藤敏幸（附小）            大学共同研究者：松本奈緒（秋田大学）</p> <p>2. 秋田大学附属小学校校内研究会保健体育部門  <u>【現在新型コロナウイルスの蔓延により休止中】</u>            授業者：伊藤敏幸（附小） 対象：小学校5年生 単元：表現運動            附属小共同研究者：佐藤秀恒（附小）            大学助言者：松本奈緒（秋田大学）</p> <p>3. 秋田大学専門科目「保健体育科教育学」に外部講師として附属中学校教諭より講話            講義担当者：松本奈緒（大学）            外部講師：藤倉 修（附中）            内容：教師になった契機、中学校教諭としての多様な仕事内容、日々の指導で大事にしていること等</p>			
<p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p>			
<p>1. 秋田大学専門科目「保健体育科教育学」に外部講師として附属中学校教諭より講話            藤倉 修先生（附中）をお願いしたい。</p> <p>2. 卒業論文で中学生を対象にアンケートを実施したいという学生がいるので、附属中学校に            研究協力をお願いしたい。</p> <p>3. 附属小・中公開研究協議会についても附属と大学の連携を図り、引き続き協力をしていく。</p>			
<p>&lt;次年度の体制&gt;</p>			
<p>部会長 松本 奈緒（秋田大学）            副部会長 伊藤 敏幸（附小）            書記 藤倉 修（附中）</p>			

令和3年度 部会活動報告書

部会名	英語（外国語活動）	記入者名	若有 保彦
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●学部の教育の充実に向けた共同の取り組み           <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習事前指導での講義（Zoom）及び附属中での一日実習の実施</li> <li>・英語教育コースの学生が附属小学校で卒論執筆に向けた調査を実施</li> <li>・「初等英語科教育学」の模擬授業について、附属小学校の藤田先生及び佐々木絵理子先生から実地指導講師として Zoom を通してご指導いただいた</li> <li>・「初等英語科教育学」の授業において、附属小の公開研の授業を編集した映像をオンデマンド教材として異文化交流の活動をテーマとした回の授業の中で扱った。</li> <li>・「初等英語科教育学演習」及び「英語科教育学演習 I」の授業において、2021 年度附属小学校の公開研（2021. 6. 18）に履修学生が参加し、小学校英語科について実践的知識を深めた。</li> <li>・「英語科教育学」の授業において、教材をテーマとした回の課題として、附属中での授業実践を「授業における ICT 活用事例」と題するオンデマンド教材の形で提示した。</li> <li>・「英語科教育学演習 III」及び「英語科教育学演習 IV」の授業において、附属小学校の授業実践例を取り上げ、外国語の学び方と教え方について考察する資料として用いた。</li> </ul> </li>   <li>●公開研究協議会などに向けた取り組み           <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属小の公開研に関して、大学教員と小学校英語担当教員との打ち合わせ及び大学教員による事前の授業参観</li> <li>・附属中の公開研に関して、大学教員と中学校英語担当教員との打ち合わせ及び大学教員による事前の授業参観</li> <li>・日豪交流授業の実施：附属小学校 4 年生とセントオリバー・プランケット小学校（St Oliver Plunkett Catholic Primary School）4 年生（年齢は 1 歳下）で交流授業を 6 月 18 日に実施</li> </ul> </li>   <li>●その他の取り組み           <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属中学校の国際交流室への英語教育専攻学生と留学生の協力</li> <li>・附属中学校において、2 月 15 日の「授業を見合う会」での授業参観及びコメント</li> <li>・2 月 19 日（土）13:00～16:00 の小学校英語教育学会東北ブロックセミナーの研修会についての情報共有</li> <li>・秋田英語英文学会や東北英語教育学会秋田支部の授業研究会への参加呼びかけ</li> </ul> </li> </ul>			
<p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●公開研究協議会などに向けた取り組み           <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属小学校及び附属中学校において、前年度に引き続いて留学生の協力を得られる体制の構築を図る。</li> <li>・中学校はオンラインで 6/3（金）に開催予定（対面とオンラインのハイブリッド型）。</li> <li>・小学校はオンラインで 6/10（金）に開催予定。</li> </ul> </li>   <li>●その他の取り組み           <ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染拡大の影響で今年度も限定的になった附属中学校の国際交流室における活動を活性化することを検討中。</li> <li>・秋田英語英文学会や東北英語教育学会秋田支部の授業研究会への参加呼びかけ</li> </ul> </li> </ul>			

- ・ICT を活用した大学と小中の教員の情報共有を進める
- ・大学教員の専門分野に関する授業をホートン先生が 12 月または 1 月に中学校で実施する

<次年度の体制>

部会長 佐々木 雅子

副部会長 保坂 美紀子

書記 若有 保彦

令和3年度 部会活動報告書

部会名	技術・家庭	記入者名	三浦 幹子
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>○公開研究討議会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校～題材「めざせ！快適生活～すずしい着方を考えよう～」 <ul style="list-style-type: none"> <li>授業案検討会</li> <li>教材調達と予備実験準備</li> <li>公開研究会授業参観</li> <li>公開研究討議会参加</li> </ul> </li> <li>・中学校～題材「中学生に必要な栄養を満たす食事」 <ul style="list-style-type: none"> <li>指導案検討会</li> <li>教材調達</li> <li>公開研究討議会参加</li> </ul> </li> </ul> <p>○教育実習指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校：主免1期1名</li> <li>・中学校：主免1期2名，副免2名</li> </ul> <p>○校内実践研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校：家庭「安全な住まい方」</li> <li>技術「情報モラルと知的財産」</li> </ul> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p>○授業検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部：附属学校が行ってみたいと検討している授業に積極的な支援をする。</li> <li>・附属学校：積極的に支援の希望を伝えるようにする。</li> </ul> <p style="padding-left: 40px;">With コロナの時代に応じた実習などを考案していく。</p> <p>○教育実習指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に学生情報等を共有し，スムーズな指導が行えるようにする。</li> </ul> <p style="padding-left: 40px;">(小学校主免1期1名，中学校副免2名の予定)</p> <p>○その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・可能な範囲で附属学校授業と学部授業とをリンクし，児童・生徒，学生に普段とは異なる学びの場を提供する。</li> </ul> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>部会長 堀江さおり</p> <p>副部長 瀬尾智子</p> <p>書記 附属小学校</p>			

部会名	総合（生活単元学習・遊びの指導・生活科）	記入者名	中野 良樹
＜今年度の実績＞			
1. 附属小学校における校園間連携の実績			
① 特別支援学校との交流			
1年生とふたば学級			
1回目 10月13日（水）10：45～11：30			
場所：附属小学校 内容：よつば学習「なかよくなるろう」障害理解授業			
特別支援学校の鈴木先生が来て授業			
2回目 12月8日（水）10：45～11：45			
場所：附属小学校 内容：各学級と一緒にの学習やペガーボール			
A組：図工 B組：音楽 C組：生活			
2年生とふたば学級			
1回目 9月3日（金）8：45～9：30			
場所：附属小学校 内容：よつば学習「なかよくなるろう」障害理解授業			
特別支援学校の鈴木先生が来て授業			
② 附属幼稚園との交流			
1年生とそら組			
11月24日（水）9：50～10：50			
場所：附属小学校 内容：「あきのものであそぼう」			
A組：どんぐりごま B組：バッグ渡し C組：記念撮影			
③ 学部との連携実践			
6月26日（金） 附属小学校公開研究協議会			
稲垣勇介：1C「きれいにさいてね」			
※ 研究協力者：学部・中野良樹教授が実践単元の授業への参観および助言，当日の協議会での指導助言を行った。			
2. 附属中学校と他校園との連携			
① 総合学習での連携			
コロナ対応のため，例年行っている DOVEACADEMY への附属小生の参加はなし。			
来年度はズーム参加なども検討したい。			
② 飛翔プロジェクト			
特別支援学校中学部生徒との交流会			
日時：12月8日，12月10日			
場所：特別支援学校体育館			
内容：ボッチャ競技			
3. 附属特別支援学校における校園間連携の実績			
① 小学校と小学部の交流（生活単元学習）			
小学校1年生とふたば学級 2回			
1回目 場所：特別支援学校（10/27）			
内容：ペガーボール			
2回目 場所：小学校（12/8）			



内容：ペガーボール＋（音楽発表、ボールリレー、製作活動）

小学校2年生とふたば学級 1回 ※2回計画していたが感染拡大防止のため1回中止

1回目 場所：特別支援学校（12/2）

内容：ペガーボール

小学校3年生とわかば学級 ※感染拡大防止のため、未実施

小学校4年生とわかば学級 3回

場所：小学校（12/6、12/9、12/16）

内容：玉入れ、的当て、ぬり絵、粘土等

小学校5年生とあおば学級 3回

場所：本校（12/6、12/9、12/10）

内容：ペガーボール、クイズ

小学校6年生とあおば学級 1回（見込み）

感染拡大防止のため、VTR等による間接交流

※この他、教育相談主任が小学校各学年に「よつば学習」（障害理解授業）を実施

② 幼稚園と小学部の交流（遊びの指導）

幼稚園そら組とふたば学級 2回

場所：幼稚園（7/14、10/7）

内容：園庭での自由遊び、焼き芋

③ 幼稚園と高等部の交流（生活単元学習）

幼稚園そら組と高等部1年生

場所：本校畑、幼稚園（5/11、8/31、10/5、10/7）

内容：苗植え、観察、いもほり、やきいも

（その他看板設置やリース作り用の材料提供など間接交流を行った）

④ 中学部と中学校の交流（体育）

中学校1年生と中学部全学年（計4回）

場所：本校体育館（12/8、12/10）

内容：ボッチャ交流

<次年度に向けた予定・課題等>

今年度に関しては、感染拡大防止のため、従来までの交流がなかなか難しい事情があった。来年度に関しては、引き続き注意を払いながらも、可能な限り校園間での交流を促進していく。

<次年度の体制>

部会長 中野 良樹（教育文化学部 地域社会・心理実践講座）

副部会長 鈴木 徹（教育文化学部 特別支援・こども発達講座）

〃 稲垣 勇介（附属小学校）

書記 武田 茜（附属特別支援学校）

令和3年度 部会活動報告書

部会名	道徳	記入者名	小室真紀（附属小）
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導案の書き方についての講義・演習 教育実習事前事後指導：11月4日（木）</li> </ul> <p>②公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の公開研究協議会に向けて事前打合せ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 5月14日（金） 公開研究協議会 6月18日（金）</li> <li>・中学校の秋季授業研究会（オープン研修会）に向けて事前打合せ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 11月10日（水） 秋季授業研究会 11月12日（金）</li> </ul> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 公開研究協議会等に向けた打ち合わせ、指導案検討</li> <li>2 部会内での取り組み（小学校：オープン研修会、中学校：授業研修会 など）</li> </ol> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>部会長：小池 孝範（秋田大学） 副部長：伊藤 郁子（附属中学校） 書記：小室 真紀（附属小学校）</p>			

令和3年度 生徒指導部会 記録

部会名	生徒指導	記入者名	北島正人
<p>&lt;出席者&gt; 小学校：佐藤（秀），小泉，佐々木 中学校：池田，伊藤            特別支援学校：佐藤（麻），下村 学部：柴田，木村，綾部，北島 計 11 名</p>			
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>1. 新型コロナウイルス感染症の拡大により，R3 年度は 2 月 16 日当日の部会での協議以外に活動はなし。</p> <p>2. 以下，今年度の各学校における現状についての報告。</p> <p>① 小学校：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者，子どもに感染が疑われる事案が発生すると，日常の活動がパッタリと止まってしまう。朝の会も長い休憩時間も自席で過ごさねばならないなど，子どもにとって相当の苦痛を強いることになる。</li> <li>・管理職からは，子どもが充実感を持てる授業を提供することが使命だという指示があるが，やはりオンライン→休み時間に制限のある生活で子どもたちに十分なことができず，何かしらのストレスがうっ積してきていると感じ取っている（トイレの鏡に水をはねかける現象が数日続くなどのサインがある）。友だちと遊べるそのものが子どもたちにとっては非常に大切である。</li> </ul> <p>② 中学校：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各学級に高性能空気清浄機，二酸化炭素濃度の測定装置を配備。</li> <li>・生徒たちは黙食の徹底をはじめ，日常的なコロナ対策に習熟している。</li> <li>・メンタル面では全体的に安定しているが，部活動，行事等は実施方法の変更を迫られる中，個々のストレスは確認されている。行動面の粗暴さ等は見られないものの，さまざまなチャレンジの機会を失うことで，意欲や自信の低下を感じる。</li> <li>・睡眠に問題が生じており，夜間のメディア使用等により就寝時刻が遅くなっている。</li> </ul> <p>③ 特別支援学校：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部会当日まで休校措置あり。</li> <li>・「ストレス」は保護者，生徒にとって大きく，朝の会のフリートーク等，精神的なつながり，かかわりを大切にしながらかかわっている。</li> <li>・保健室に具体的な訴えは来ていないが，冬季休暇中について，メディアに関するアンケートを実施したところ，長期休暇ではメディア利用が増えていること，部活動の禁止等により家に閉じこもりがちであることが明らかになった。</li> <li>・特別支援学校では，日常的に保護者の負担は大きい，コロナ禍においてもデイサービス等を利用しながら対応している。</li> <li>・何気ない日常が失われ，友人に会いたい，触れ合いたいという子どもたちの要求が高まっていると感じる。</li> </ul> <p>④ その他：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（綾部：睡眠教育，睡眠への心理的対応等が専門）子どもたちは，コロナの影響により十分な睡眠を取れているグループと，長時間の家庭生活等によりメンタルヘルスを含め状態が悪化しているグループに二極化しており，保護者を含め心理教育の必要性を感じている。</li> </ul>			

<次年度に向けた予定・課題等>

- ・綾部（心理学教員）：要請があれば、睡眠教育に関する心理教育の場を提供することが可能である。
- ・かねてから検討している生徒指導部会における事例検討の実施について考えていく。
- ・柴田（心理学教員）：事例化している子どもたち以外にもできることを考える。そのために、所属する大学教員が提供できる専門性についてご提示する。
- ・その他、やり取りが必要な場合は名簿記載のメールアドレスにより連絡を取り合っていく。

文責：北島 正人

<次年度の体制（予定）>

部会長 北島正人  
副部会長 伊藤晃子  
書記 佐々木真喜子

令和3年度 部会活動報告書

部会名	進路指導部会	記入者名	臼木智昭
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>出席者 附属特別支援学校 黒木先生 教育文化学部 前原先生、益満先生、石黒先生、臼木（部会長）</p> <p>情報交換</p> <p>特支の実習先・就職先としてスターボックスが協力的であるとの報告があった。 以前から、特支の実習先の確保には苦勞しているとの報告があった。</p> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p>部会メンバー（地域文化学科）が、行政や経済団体等との懇談の際に、特支の実習先としての協力要請（チラシ等の配布）をすることとした。</p> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>部会長 前原和明（こども発達・特別支援） 副部会長 黒木良介（附属特別支援） 書記 臼木智昭</p>			

## 令和3年度 部会活動報告書

部会名	情報教育	記入者名	林 良雄
<p data-bbox="204 286 427 315">&lt;今年度の実績&gt;</p> <p data-bbox="204 371 1394 443">GIGA スクール構想で導入された機器の利用は特別支援学校や附属中学校において進められている。今回附属小学校の教員の参加がなかったが、順次進められているようである。</p> <p data-bbox="204 584 624 613">&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ul data-bbox="204 629 1394 824" style="list-style-type: none"><li data-bbox="204 629 1394 741">・初期より機器の不具合の発生は少なくなりつつあるようであるが、授業で数台の不具合が出るようである。これについては、今年度と同様、本学部の技術職員の協力の下、解決していくことで確認した。</li><li data-bbox="204 757 1394 824">・教科等での活用方法についての事例の共有が必要であるとの意見があった。来年度に向けてその共有方法を考え、共有資料の収集を行うこととした。</li></ul> <p data-bbox="204 1055 427 1084">&lt;次年度の体制&gt;</p> <p data-bbox="204 1137 459 1211">部会長 林 良雄 副部会長 加藤慎一</p>			

令和3年度 部会活動報告書

部会名	学校経営	記入者名	鎌田 信 (所属 教育文化学部)
<p>&lt;今年度の実績&gt;            ~コロナ禍の学校経営について~</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ICT 環境等の整備               <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属四校園いずれにおいても、「学びの保障」の観点から ICT 環境の整備に努め効果をあげられる段階まで来ている。</li> <li>・HP の更新、You Tube ・ インスタグラム等の活用により学校からの発信力に勢いが付いた状況である。この事は、保護者からの理解も得られ学校への評価につながっている。</li> <li>・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けても ICT 環境の整備は効果をあげている。タブレットの家庭での利用は、保護者からも支持されながら効果の一端を担っている。</li> <li>・公開研究会のオンライン化は、対面公開以上に多くの方の耳目を集め多様な考え方に触れる機会ともなった。</li> </ul> </li>   <li>○ 附属学校経営委員会はリモート開催等を活用し、5回開催し、附属学校園全体に関わる事項を取り上げて協議を行った。4校園間の共通理解を図ることにもつながる、有意義な委員会の運営が出来た。</li>   <li>○ その他               <ul style="list-style-type: none"> <li>・感染予防の観点での在宅勤務は、多忙感の緩和につながったのではないかと考えている。働き方改革の意味からすると、ICT 環境整備の推進を切っ掛けとして校務の見直しが進んだ面もある。運動会を体力調査と重ねて行ったことはその一つの例である。</li> <li>・コロナ禍での教育実習については、全国の交流会で「学生の質の低下」が盛んに言われていたが、本四校園にあってはそうした課題はなく恵まれていると感じた。一方で、真面目過ぎるのももう少し考え方に幅やゆとりがあってもいいのではと感じる。</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 四校園の共通理解について               <ul style="list-style-type: none"> <li>・自校の新型コロナウイルス対策で手いっぱい状況が続いていた。異校種間交流については、小1・中1ギャップや不登校の課題もあるので接続の在り方について具体化させたい。</li> </ul> </li>   <li>○ コミュニティー・クールについて               <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属学校園としては全国の中でも、早々と立ち上げたコミュニティー・スクール。公立学校とは一味違った運営ができるのではないかと考えている。地域共同委員会が立ち上がってはいるが、コロナ禍により実動が難しい状況にあるものの、四校園が共通理解に基づき目指すべき児童・生徒像を確立する必要がある。四校園に限らず、教員側にこうした共通像があると今後の取組への意欲が高まるという経験もしている。</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;次年度の体制&gt;            部会長 宇野 力            副委員長、書記は次年度検討する y。</p>			

令和3年度 部会活動報告書

部会名	幼稚園	記入者名	瀬尾知子（所属：こども発達・特別支援講座）
-----	-----	------	-----------------------

<今年度の実績>

1. 附属教員の学部での授業

No.	授業名	実施日	担当者
1	教職入門	5月12日(水)	石田浩子
2	教育実習 事前事後指導	6月17日(木)	村上美紀
		12月2日(木)	石田浩子・後藤笑美・今野菜穂子・村上美紀・石川瞳
3	教育実践演習	12月3日(金)	石田浩子・後藤笑美・今野菜穂子・村上美紀・石川瞳
4	こども発達援助論	1月6日(木)	幸野谷ひろみ
		1月20日(木)	村上美紀

2. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録（大学教員の保育観察・記録 ～週1回程度）

- ① テーマ1：遊びの中で育つかかわり（1年次）～かかわりを支える保育者～  
（附属幼稚園研究テーマ）
- ② テーマ2：遊びを中心とする保育を考える
- ③ テーマ3：幼児期の認知発達にふさわしい「学び」とは～幼児が遊びの中で学んでいること～  
（山名裕子）
- ④ テーマ4：幼児期の食育と社会情動的スキルの発達（瀬尾知子）
- ⑤ テーマ5：幼児期の遊びにおける「身体性」の役割の検討（保坂和貴）

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

- ① 日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築 参与観察・保育参加
- ② 大学における保育講座（秋田乳幼児保育研究会）への附属教員の参加（2回）
- ③ 大学教員からの研究情報の提供
  - ・研究会報の発行 『秋田乳幼児研究会報第13号』の発行予定
  - ・「研究会たより」の発行

(3) 保育実践研究・保育カンファレンス（学部教員の研究保育・園内研究会等への参加）

No.	実施日	内容	参加者	備考
1	5月14日(金)	4歳児（ほし組） 研究保育	鈴木翔・瀬尾知子・ 山名裕子	参観・研究会への参加
2	6月4日(金)	園内研	鈴木翔・瀬尾知子・ 山名裕子	園内研への参加
3	6月8日(火)	3歳児（もり組） 研究保育	瀬尾知子・保坂和貴・ 山名裕子	参観・研究会への参加



No.	実施日	内 容	参加者	備 考
4	6月10日(木)	園内研・オンライン保育研究会打ち合わせ	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	園内研への参加・研究会打ち合わせ
5	6月14日(月)	園内研	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	園内研への参加
6	6月26日(土)	オンライン保育研究会	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	保育研究会への参加
7	7月15日(木)	3歳児(はな組)研究保育	瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	参観・研究会への参加
8	7月29日(木)	保育研修会	保坂和貴・山名裕子	研修会講師
9	9月14日(火)	5歳児(そら組)研究保育	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	参観・研究会への参加
10	10月4日(月)	園内研	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	園内研への参加
11	10月11日(月)	園内研・ドキュメンテーションカンファレンス	保坂和貴・山名裕子	園内研への参加
12	10月19日(木)	5歳児(そら組)遊びを語る会	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	遊びを語る会への参加
13	10月22日(金)	4歳児(ほし組)遊びを語る会	瀬尾知子・山名裕子	遊びを語る会への参加
14	10月28日(木)	3歳児(もり組)遊びを語る会	瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	遊びを語る会への参加
15	11月1日(月)	園内研・ドキュメンテーションカンファレンス	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	園内研への参加
16	11月22日(月)	園内研・保育研究講演会 zoom リハーサル	山名裕子	研究会打ち合わせ
17	11月30日(火)	保育研究講演会(オンライン)	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	参加・コーディネーター
18	12月14日(火)	園内研・保育研究講演会 振り返り	鈴木翔・瀬尾知子・保坂和貴・山名裕子	園内研への参加

#### (4) 教育実習事後指導を通して

- ① 大学教員及び附属幼稚園教諭が事後指導において学生の保育記録をもとにしたカンファレンスを実施。
- ② 記録を練り直し、再考察をまとめたものを編集して冊子として作成。
- ③ 幼稚園教育実習の記録『たまご19号(2021年12月発行)』

### 3. 附属4校園の交流・参観

#### 附属特別支援学校

5歳児のいもほり交流(10月5日)

附属特別支援学校高等部の生徒が、自校の畑に植えたさつまいもの収穫作業に、年長園児が参加した。5月には水やり、10月には収穫したさつまいもで焼き芋、12月にはさつまいものつるを使ったクリスマスのリースを作成し特支高等部の生徒にプレゼントするなど、年間を通して交流を深めることができた。また、栽培や収穫の楽しさを経験することができた。

#### 4. 卒業研究の受け入れ

- (1) 異年齢保育の意義と子どもの育ち—保育者のかかわりに着目して—
- (2) 保育現場での子どもの笑顔や笑いに関する研究
- (3) 幼児が使用するオノマトペの特徴について—絵本と子どもの言語使用をもとに—
- (4) 幼稚園生活における4歳児の人間関係の変容—保育者のかかわりに着目して—
- (5) 絵本の読み聞かせ場面における親子のかかわり—絵本の中のお気に入りを中心として

#### 5. 授業等での附属幼稚園での観察

教育実習事前事後指導, 子ども理解の理論と実践 (大学院), 子どもの教育と発達 (大学院)

#### <次年度に向けた予定・課題等>

##### 1. 大学教員の継続的な参与観察とそれを生かした研究推進

- (1) 令和3年度同様に, 学部・附属幼稚園が連携, 協力してそれぞれの立場で研究を進め, その成果を幼稚園研究紀要, 学会誌への投稿, 学会発表によって地域等に発信する。
- (2) 双方の主体性が発揮できる対等な関係での共同研究体制の模索。

##### 2. 附属教員の学部での授業

教職入門, 教育実習事前事後指導, こども発達援助論, 教育実践演習

##### 3. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

- (1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録
- (2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り  
日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築
- (3) 学部教員の研究保育・園内研究会・保育カンファレンスへの参加
- (4) 教育実習事後指導を通しての学生指導

##### 4. 大学教員の附属学校園の公開研究協議会などへの参加

- (1) 附属幼稚園で2回の公開研究協議会を実施予定  
第2回目は保育以外の企画 (講演, シンポジウム等) を大学教員が担当
- (2) 公開保育の事前研究会への参加
- (3) 保育へのコメンテーターとしての参加

#### <次年度の体制>

部会長: 山名 裕子

副部会長: 石井むつみ

書記: 瀬尾 知子

令和3年度 部会活動報告書

部会名	中学校部会	記入者名	加賀谷武英
<p data-bbox="204 286 427 315">&lt;今年度の実績&gt;</p> <ul data-bbox="212 416 1385 488" style="list-style-type: none"><li>・ 2 / 16 (水)に開かれた附属学校学部共同委員会における中学校部会への参加は1名でした。中学校部会として、大きな課題点などはありませんでした。</li></ul> <p data-bbox="204 1055 624 1084">&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ul data-bbox="212 1137 1385 1209" style="list-style-type: none"><li>・ 次年度も四校園(幼稚園, 小学校, 特別支援学校)との情報交換と学部との連携に努めていきたいと思います。</li></ul> <p data-bbox="204 1693 427 1722">&lt;次年度の体制&gt;</p> <p data-bbox="204 1776 414 1805">部会長 ○○○○</p> <p data-bbox="204 1821 443 1850">副部会長 △△△△</p> <p data-bbox="204 1865 387 1895">書記 □□□□</p>			

部会名	特別支援学校部会	記入者名	藤井慶博
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p>			
<p>1 公開研究協議会の反省より</p>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 内容、タイムスケジュール、とてもよかった。</li> <li>• 事前に動画で参加する学部について知り、生徒の成長と、その要因を直に感じながら研究会に臨むことができた。</li> <li>• 過年度の取り組み、成果から研究の主題、設定理由、目的と方法、まとめが分かりやすく、ポイントも簡潔にまとめられていた。特に「生涯学習力」を高めるために大切にしていこうための5つの項目が、小から中へ、中から高へ連続性のある項目もあり、卒業後につながるものと感じた。なりたい自分シートは大変興味深かった。</li> <li>• 「死を迎えるその日まで学び続けたい」という言葉にも共感した。また、生徒に「教える」ことより「一緒に学ぶ」ことで教師も生徒も学び続けていくことにつながっていくと感じ、実践していこうと思った。</li> <li>• ヒト・モノ・コトに関わる姿・態度の評価」についての意見交換を通して、内面の評価のあり方や具体的な方法について学ぶことができた。</li> <li>• オリジナルマップ活用推進について伺った。今、ICT活用実践に試行錯誤しながら取り組んでいる。この協議会で、準ずる指導の場合とは異なる、生徒の学びに繋がる新たな活用方法を教えていただいた。</li> <li>• 地域との関わりを生徒の立場で考えた授業づくりが参考になった。活動した場所、経験したことをマップに自分で記録していくことは、生活の場を具体的に広げていくものだった。また、経験したことの記録を振り返られるツールをもてることは言葉や他の経験と結び付けるため、ぜひ参考にしたい。</li> <li>• エンジョイタイムの取り組みが参考になった。5つの視点を指導者で共有しながら変容を見取っていくのはよいと思った。</li> <li>• 附属特別支援学校の研究の全体、そして各ワーキンググループの成果と、その関連性について分かりやすく、知ることができた。</li> <li>• 作業学習に関して、聴覚支援学校は今後多様な生徒の割合が大きくなっていくと予想される。今回得られた情報を活かして、生徒の社会参加に必要な力を育むことができるよう、学習環境作りに努めたい。</li> <li>• 堤先生のお話は、教師というよりは、一個人として伺った。まずは、学ぶ喜びを自分が感じ、学ぶことの素晴らしさを子ども達に伝えていくのが大人であり、それを生業としているのが教師です。多様な価値観を学び、生徒とフラットに向き合いたいと思った。また重度の障害がある聴講生の方のお話から、訪問教育を担当していたことも思い出し、学ぶこと、教えることの重さも考えさせられた。</li> <li>• 講演の中で、「学ぶとは、自己の絶えざる編み直し」という言葉が心に残った。既存の価値観を学びほぐし、つなぎ直し、編み直す。学び続ける教師でありたいと思った。と同時に、「教える」がなくとも「学ぶ」は生じるということから、謙虚な姿勢、反省を肝に銘じたいと思った。</li> </ul>			
<p>2 研究協力者等からの助言の共有</p>			
<p>武田篤氏（研究協力者）</p>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 特に良かったと思ったのは、若い先生方がリーダーになって発表している姿に感動した。若い先生方が育てているのを実感した。今後とも若い先生方のパワーを引き出す研究体制を継</li> </ul>			

続してほしい。

田村順一氏（パナソニック教育財団委託アドバイザー）

- 意見交換会でも少しお話しさせていただいたが、学校全体としての取り組み、「生涯にわたって学び続ける子どもの育成」と言ったテーマは妥当なものと思う。キャリア教育とはひと味違うアプローチで、学部ごとにテーマを理解した上で子どもの発達に応じて取り組まれていると感じた。夏の研究会でも少しお話ししたように、学べる資質を伸ばすためには、具体から抽象への橋渡しをその子の状態や特性に応じて展開することだと私は考えている。知的障害の子どもは、自分が経験した範囲(あるいはパターン化した行動)には強いが、いったん新しい出来事があっても、なかなかそこに適応できないと言うことがよく言われる。それは、具体的な実体験にとどまり、それを汎化できる概念（つまり、いったん客観的なマップに落とし込んで違う角度から見直す）ことを学んでいないからだと思う。
- 三次元の実体験から、二次元のマップに転換して考えるのは、最初は難しいかもしれないが、そうやってモデル化、あるいは象徴化してものを見る習慣を身につけることにつながると思う。これができれば、一種の自分の生活エリア内のデータベースのようにもなるし、さらに言語化にまでつなげられれば、予定表やリマインダー、メモする、日記を書くなど、体験の言語化につながり、生涯学び続ける上で大きなスキルとなるし、ICT 機器がそのための有用なツールになる。ICT 機器は知的障害の子どもたちにとって、生涯のパートナー、あるいは困ったときに助けてくれる、スタンド・バイ・ミーな存在になるのではないか。オリジナルマップ作りの実践が、そうした子どもたちの明るい未来につながる とそのように評価してもよいのではないかと考える。

堤英俊氏（講演講師）

- 非常に構造化された研究協議会で、準備も相当に大変だったのではないかと思います。

菊地一文氏（次年度講演講師）

- 資料データを見て共感する部分が多くあった。また、講演についても私が話してきたことと共通することが多くあった。

阿部圭但氏（文科省）

- 生涯学習力の再確認、授業づくりへのフォーカスという手立てでとても分かりやすくまとまっていた。この研究は学校だけでなく、社会全体を変える力があると認識している。高等部の分科会でも少し話したが、社会教育側をはじめ、生涯学習提供団体の方々と話すると、「特別支援学校との連携はない」だけでなく、「学校みたいにはしたくない」という意見も聞かれる。その原因として考えられることは、障害者の「学び」を考えるにあたり、学校と社会、それぞれで完結させようとしているからではないか。全国を見てもほとんどないが、特別支援学校在学中から卒業後の「学び」を見据えた実践には非常に価値があり、社会を変える大きな可能性がある。今回の公開研の参加者を見ると、特別支援学校関係者のほか、県の生涯学習課の長崎社会教育主事や、いつもの生涯学習センターの方々の参加があった。そのような方々の参加があること自体素晴らしいことだと思う。さらに、今後に向けて、生涯学習提供団体の方々の参加もあればよかったなと思った。生涯学習提供団体についての情報は県のコンソーシアムにあると思うので、来年度に向けて是非連携を強めていただければと。

鈴木徹氏（研究協力者）

- ・小学部の「エンジョイタイム」、私はとても気に入っている。「ヒト・モノ・コトを通して、子どもがさまざまな力を付けていく」、とっても素晴らしい取り組みだと思っている。従来の、特定のモノサシで子どもを評価するのではなく、「ヒト・モノ・コトを通して」という、ある意味自由度の高い活動を設定し、子どもがそれぞれの方法(もちろんそこには教師が色々と働きかけて)で世界を広げ、教師はそこから感じとれる子どもの姿を評価していく、という試みはとても斬新だと思う。ただし、斬新であるが故に、先生たちは「何をどう評価して良いのか分からない」と不安になると思う。私としては「どうやって子どもの姿を示せば良いのか」を先生方と一緒に考えていきたいと思っている。簡単に言うと、「不安にならなくて大丈夫！」です。評価するモノサシを探すのではなく、目の前の子どもの変った姿をどう描けば良いのかを一緒に悩みたいと思っている。評価における客観と主観の問題は、私はさほど気にする必要はないと考えている。教育は 科学ではないので。何か軸を持つことで、見えなくなることもある。
- ・加えて、毎時間子どもが学びを実感できる瞬間を作ってあげる必要があると思っている。子どもがそれぞれ「ヒト・モノ・コトを通して」活動を楽しんでいる瞬間を教員がしっかりキャッチして、子どもに実感できる形でフィードバックしてあげる、その繰り返しで「明日もエンジョイタイムしたい！」に繋がると思う。このあたりに関しては、小学部の先生方は子どもを褒めるのがとても上手だし、既に実施されていることかと思う。

栗田寿氏（研究協力者）

- ・研究の報告や動画など、現代的でかつ説得力がありました。子どもの声が入った動画に、学校全体の雰囲気表れていて見ていてとても明るい気持ちになった。

<次年度に向けた予定・課題等>

- ・研究テーマの最終年度を迎えるため、公開研究協議会でいただいた意見等を次年度の研究・学校運営の柱として生かしていきたい。本研究の成果をどのように「みえる化」していくのが課題と言える。

<次年度の体制>

- ・部会の体制として、多くの学部教員に共同授業や研究の支援を仰ぎながら進めていきたい。

部会長・・・令和4年度特別支援学校長

副部会長・・・令和4年度特別支援学校副校長

## 令和3年度 部会活動報告書

部会名	FD	記入者名	前原和明
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>令和4年2月16日に、附属学校・学部共同委員会をオンラインにより開催した。「大学におけるダイバーシティ教育」に関する講演会の後、教科別部会、領域別部会に加え、校園部会、FD部会、教育実習部会といった学校の運営面、教職員の資質向上、教員養成という視点による充実させた内容となった。</p> <p>また、令和4年1月28日には教職大学院と附属学校との合同FDを行った。その際、これまでのインターンシップの成果と課題を踏まえ、インターンシップの内容に関する改善策が提言された。具体的には、教職大学院1年次が4校園に各2日（計8日）で行なっていた内容を、全院生が各校園で共通に行う実習を基本1日（計4日）、残りの4日を希望する校園での実習とする案が示され、概ね共通理解を得ることができた。また、院生の研究テーマに基づいた実習のあり方、大学院生のインターンシップ（実習）と学部学生の実習の違いについての理解を広げる必要性などが議論された。</p> <p>その他、随時、FD部会の活動内容について部会員間での情報交換を行った。</p> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p>様々なイベント等との共催等、FDの実施のあり方について引き続きの検討を行っていくこととする。</p> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>原義彦先生の退職予定に伴い、次年度の体制を変更する。書記を担当する会員はなしとし、以下の体制とする。</p> <p>また、必要に応じて部会員の補充を行う。</p> <p>部会長 前原 和明 副部会長 藤井 慶博</p>			

## 令和3年度 部会活動報告書

部 会 名	教育実習部会
記入者名	田 仲 誠 祐
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>○教職ポートフォリオ（2）の改善と活用の工夫</p> <p>2020年附属学校園実習改善WGの3つの提言を踏まえ、個々の学生が主免I期実習前に、「自身にとっての課題は何か」という課題意識を明確できるように「教育実習に向けた学びの構えをつくるためのワークシート」を設けた。</p> <p>令和4年度からは、この記述を生かした事前指導、さらには実習中指導、成長を実感する事後指導の改善に取り組んでいく。また、教職ポートフォリオは、WebClassにも掲載し、ダウンロードして活用することができるようにする。</p> <p>&lt;参考：WGの3つの提言&gt;</p> <p>提案①：大学、学生、附属学校園の3者が実習に係る情報共有を強めるため、「教職ポートフォリオ」の有効活用を図る。</p> <p>提案②：附属の研究や学部授業等を通じて、事前事後指導と教育実習のつながりを強める必要がある。提案③：学部学生の実習期間中に、学部教員等との省察の時間を設ける。</p> <p>○教育実習実施委員会の取組</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・感染症拡大にともない、日程変更、実習方法の変更を余儀なくされた。附属学校園のご理解とご協力を得て実習を終えることができた。附属学校園に感謝申し上げたい。</li><li>・実習事後アンケートを実施した。その結果、例年と異なる実習となったが、学生は、教育実習において4つの力を概ね身に付けているという回答が多かった。不安を抱えている学生も2割程度見られ、学部教員で実態を共有している。</li><li>・大学の中期計画において、次年度、附属学校園での教育実習の充実・改善に資する内容の実習生へのアンケートを実施することになっている。</li><li>・教職ポートフォリオの4つの力に対応するよう、小・中・高・特支の実習評価表を改定した。幼については今後の課題とする。</li><li>・教職ポートフォリオの電子化については、WebClassにファイルデータをアップすることになっている。新たに設けられた「自身にとっての課題」は、次年度からダウンロードして使用できる。</li><li>・教職ガイダンスに掲載の学習指導案を、新教育課程の目標、評価の観点に合致したものにするため、改訂作業を行っている。附属学校園のご協力に感謝申し上げたい。</li></ul> <p>○令和4年1月28日 令和元年度教職大学院FD「附属学校園との連携推進のために」</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・各学校園における教職大学院のインターンシップの実際（内容、効果的事例、課題）についての情報共有した。</li><li>・次年度のインターンシップIにおいては実施の枠組みを改善することを提案し、概ね了承された。（令和4年度からは、各附属学校園で1日ずつ計4回「各学校園の現状を知る」をテーマに実習を行い、6月からは希望校においてインターンシップを行う予定）</li></ul> <p>○その他、次年度に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・教育実習において「学生は何をどのように学んだか」について、放課後の省察場面などの在り方も含め調査研究を進めていく必要がある。</li><li>・次年度から、教育実習実施委員会の委員長、副委員長、各附属学校園の実習担当が出席できるように実施方法を改善してほしい旨、事務局に要望する。（例えば、部会を1部（教科部会）、2部（教科以外）のように2部に分けて実施するなど）</li><li>・役員は次のとおり決定した。 部会長 細川 和仁 副部会長 附属学校園実習担当（ローテーションで）、次期は中学校。</li></ul>	



## 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会要領

[制定] 平成24年10月4日

(目的)

第1条 秋田大学教育文化学部附属学校運営会議要項第8条に基づき、秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会（以下「専門委員会」という。）を置く。

(所掌事項)

第2条 専門委員会は、学部教員と附属学校園教員との共同・協力に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 学部・研究科の教育の充実に関すること
- (2) 附属学校園での共同研究及び共同授業に関すること
- (3) その他共同・協力に係る重要事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学部長が指名する評議員 1名
- (2) 附属教育実践研究支援センター長
- (3) 附属教育実践研究支援センターから推薦された教員 1名
- (4) 各附属学校園副校長
- (5) 第8条に定める各部会の部会長
- (6) 事務室長
- (7) その他委員長が必要と認めた者

(任期)

第4条 前条第3号及び第7号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5条 専門委員会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長は、第3条第1号の委員をもって充てる。

3 副委員長は、委員長が指名する。

(議事)

第6条 専門委員会は、委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、委員長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第7条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者を出席させ、その意見を聴くことができる。

(部会)

第8条 部会は、教科別部会及び領域別部会とする。

2 教科別部会は、国語部会、社会部会、算数・数学部会、理科部会、音楽部会、図画工作・美術部会、体育・保健体育部会、技術部会、家庭部会、英語部会及び生活・総合部会とする。

- 3 領域別部会は、幼児・保育部会、特別支援部会及び教育指導部会とする。
- 4 英語部会には、外国語活動を含む。
- 5 生活・総合部会には、総合的な学習の時間の分野を含む。
- 6 教育指導部会には、道徳、特別活動、心理指導、生活・健康指導、学校経営、情報機器の活用の分野を含む。

(部会の構成員)

第9条 学部教員及び附属学校園教員は、一つ以上の部会に所属するものとし、複数の部会への所属を妨げない。

- 2 各附属学校園は、生活・総合部会に代表者各2名を選出する。ただし、幼稚園は1名とする。
- 3 幼稚園以外の附属学校は、幼児・保育部会に代表者1名以上を選出する。
- 4 特別支援学校以外の附属学校園は、特別支援部会に代表者1名以上を選出する。
- 5 各附属学校園は、教育指導部会に養護教諭を含む代表者3名以上を選出する。ただし、幼稚園は2名以上とする。

(部会の組織)

第10条 各部会は、互選により、次の各号に掲げる者を選出する。

- (1) 部会長 1名
  - (2) 副部会長 若干名
  - (3) 記録 1名
- 2 前項各号の者の任期は1年とし、再任を妨げない。
  - 3 欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(庶務)

第11条 専門委員会の庶務は、事務部において処理する。

(補則)

第12条 この要領に定めるもののほか、専門委員会の運営に関し必要な事項は、附属校運営会議が別に定める。

附 則

- 1 この要領は、平成24年10月4日から施行する。
- 2 この要領の施行後最初に委嘱される委員の任期は、第4条の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

## 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会に関する申し合わせ

平成 22 年 7 月 8 日

一部改正 平成 25 年 10 月 1 日

- 1 会議の日常的な運営は、副議長が担当し、各部会との連絡調整、各部会の名簿作成及び報告書作成の調整などを行うものとする。
- 2 部会長と副部会長は、学部教員と附属学校園教員とで分担することが望ましい。
- 3 各部会は、年度当初に年度活動計画書を策定し、年度末に年度計画の実施状況等を年度活動実績報告書にまとめ、それぞれ運営委員会に提出する。
- 4 部会が作成する年度活動計画書及び年度活動実績報告書の記載内容には、次の項目を盛り込むことが望ましい。
  - ①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み
  - ②公開研究協議会などに向けた取り組み
  - ③共同研究や共同授業などの取り組み
  - ④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み
  - ⑤部会の組織、運営になどに関する取り組み
  - ⑥その他の取り組み
- 5 副議長は、毎年度当初において、学部教員及び附属学校園教員に対し、部会所属の希望調査を行い、また、各部族学校園に代表者の選出を依頼し、部会の構成員を確定した後、名簿を作成する。
- 6 名簿には、部会構成員の氏名、所属、内線番号及びメールアドレスを掲載し、学部教員及び附属学校園教員全員に配布する。日常的な連絡はメールを活用する。
- 7 各附属学校園から選出されて部会に所属する附属学校園教員が、他の部会にも所属する場合には、選出された部会の活動を優先する。
- 8 専門委員会は、附属学校園教員の選出された部会での活動と他の部会での活動が当該教員の過度の負担とならないよう、可能な限り配慮する。
- 9 部会は、最低でも年度当初及び年度末に全体会を開催する。
- 10 会議は、最低でも年 1 回、全体会を開催する。

令和3年度附属学校学部共同委員会編集部

委員長 星 宏人（英語・理数教育講座）

副委員長 平良一史（英語・理数教育講座）

令和3年度 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会 実践報告書

発行 令和4年3月14日

編集 附属学校学部共同委員会編集部

発行者 秋田大学教育文化学部